
毒舌？な篠(かがり)ちゃんのほのぼのオカ研生活

雪海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

「JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

毒舌？な^{かがり}篠ちゃんのほのぼのオカ研生活

【Zマーク】

Z0354Y

【作者名】

雪海

【あらすじ】

この物語はRewriteの一次創作です。一次創作で且つ作者の技量が低いため、原作との矛盾、キャラ崩壊などが起きる危険性があります。もちろん矛盾やキャラ崩壊などはあまり起きないよう気を付けますのでそこまでは気にしなくても大丈夫……のはずです。

もし原作との矛盾が発生したとしても、JはRewriteの世界とよく似た別の世界という認識でお願いします。ちなみに篠にはオリ主が憑依しますので、篠は完全に

違うキャラとなりますのでご了承下さい。ついでに籌は原作にはない能力を使つたりしますがそれについてもご了承下さい。

長々と書きましたが、最後にこの作品の成分について。

この作品は主に日常成分が多めです。バトルやシリアルスも少しあるかもしれません、ほぼ日常がメインと思つてもらつてかまいません。

以上の事を踏まえた上で本編をお楽しみ下さい。

この作品は作者のブログ、二次小説創作所でも公開しています
公開の順番としては、とりあえずまず先にブログで公開して
細かな修正を加えた上でこちらに投稿という順になります。

この二次小説はネタバレが多分に含まれています

09月30日(木) プロローグ的なもの

「あれ？ じじいじじだ？」

目が覚めると何故か田の前に木々が立ち並んでいた。周りを見渡してみると、やはり同じように木々が立ち並んでいた。周囲の景色を見る限りどうやらここは森のようだ。

「俺は確かに普通に家で寝ていたはずだが……」

「OK。ちょっと寝起きで頭がすっきりしないが今が異常事態というのは分かる。」

「一端落ち着いて何故こんな状態になつたのかを思い出してみよう。昨日は休日だったから Rewrite を一気に徹夜で終わらせた後……寝つたんだっけ？ まあ徹夜で眠気がピークに達していたからそのまま意識を手放したんだろう。」

うん、昨日の行動を振り返つても今の状況は全く理解できしない。どうあえずは現時点での問題点を整理してみよう。

1・ここがどこだか分からない

部屋で普通に寝たはずなのに何でこんな森の中にいるんだろう？

2・何でこんな場所にいるのか分からない

もしかして誘拐でもされたのか？

でも家は金持ちでも何でもないし、誘拐犯もいないみたいだから違

うかな。

3・1Jの森がどの程度の広さか分からない
今いる場所からは出口は見えないから
それなり以上の大きさなんだろうけど……

よしつ！ 何が何だかさっぱり分からないと「1J」が分かつたぞ
！！

とりあえず「1J」に屈ても何も分からぬしまずはこの森を抜けだそ
う。

幸い向こうに川があるみたいだし、
川を下つていけばきっと森から出れるはず。

さて、まずは川の傍まで行くとしよつ。
もしかしたら誘拐犯とかいるかもしれないし、
できるだけ物音は立てないようにつと。

よし、何事もなく川に到着。

さて、後は川の下流に向かつて歩いていくだけだな。

ふと川を覗いてみると水面に黒いワンピースを着た少女が映つてい
た……

「誰だつ！」

振り返りながら声をかけるもそこには誰もいなかつた……
見間違いか？ 確かにはつきりと少女の
姿が映つたように見えたんだが……

もう一度川を見てみるとまた黒い

ワンピースを着た少女が川の水面に映っていた。

振り返る。

誰もいない。

もう一度川を見てみる。

黒いワンピースを着た少女が映っている。

あれ？ まさかとは思うが……。

俺はある恐ろしい仮説を思いついたため、左手を挙げてみた。すると川の水面に映つている少女も左手を挙げた。

ま……まだ何かの間違いかもしれん……

その後様々な複雑な動きをしてみたが川の水面に映る少女の動きと完全に一致したため、仮説が正しいと認めざるを得なかつた。

といふかちょっと田線を下に向けたら黒いワンピースが見えた。最初から下を向いてれば早かつたな……。

まあとりあえず色々と不可解な出来事が起こつてゐるがもう一度現状を確認してみよう。

1・ここがどこだか分からない

もつ色々とおかしな事が起きすぎでどうでもよくなつてきた。

2・何でこんな場所にいるのか分からない
上に同じ

3・何故か見た目がRewriteの籌かがり

さつき川に映つた顔を見て分かつた。

不可解な現象は正直これだけでお腹一杯です。

以上の状況を踏まえていくつかの仮説を打ち立てた。

1・実は俺は籠だった。
ない。これはない。

2・これは俺の夢である。

ありえる。というか可能性としては一番高い。
籠の姿のもRewriteをやつた後すぐ元に寝たなら納得できる
気がするし。

だけどそれにしては意識がはつきりしてこる気がする。
今まで見たことが無いから分からないうが、
もしかしてこれが明晰夢ってやつだらうか？

まあ現時点では確認の仕様がないし、この仮説は保留だな…。

3・俺が籠に憑依した。

どこの一次小説だよ！…って突っ込みたいところだけど、
夢以外の可能性としてはこれくらいしか思いつかないし、
十中八九夢だらうけどこの仮説も一応保留としておこう。

今の所はこのくらいしか思いつかないな…。

まあ夢だつた場合はしばらくすれば田が覚めるだらうし、
最悪を予想して行動した方がいいだろう。

とにかく現時点では、憑依したと仮定して動くじよ。

……とりあえずまずは寝床の確保からだな。

「 篠さんマジでスペック高すぎー。」

おっと、あまりにハイスペックな身体について一人で叫んでしまつた。

お久しぶりです。篠です。初めてましての方は前話を読んでみましょう。

さて、メタな発言はこの辺で辞めておくとしよう。

とりあえずあれから寝床をさがすついでにどんなことができるか色々実験をしてみたらこの身体のとんでもないスペックが発覚。

1・身体能力が物凄く高い

何かジャンプしたら普通に数十メートルは跳んでどの方向に街があるか分かった。それと試しに木を殴つてみたら、

ぱきっと木が折れた。

2・リボンが強い

あの後しばらくしたら身体がなじんだのか普通にリボンが使えるようになったので、試しに木にぶつけてみた。木が砕けた。

3・認識搅乱能力が便利すぎる

リボンが使えるようになったころ認識搅乱能力？も使えるようになった。もしかしてこの能力使わなかつたらガーディアンとかにも発見されないんじゃないかな？

まあ認識搅乱能力は自分一人じゃ確認できないし、

後で再度実験してみるとしよう。

後分かつたことといえば、どうやら夢じやなかつたみたいだ。

丸一日くらいは経つたと思つたけど全然目覚める気配がない。夢じやないと分かつた時はちょっと絶望しかけたけど、考え方を変えてみれば案外これはこれでありかもしれない。家族や友人に会えないのはつらいけど、超ハイスペックな身体が手に入つたし、Rewriteはかなり面白かったし。死亡フラグ満載だけこの超ハイスペックな身体でばつべきばきにへし折つてやんよー！

さて、色々と一人でできる確認も終わつたし、とりあえずさつきジャンプした時に見えた学校っぽい所に行つてみようかな。まだここがRewriteの世界と決まつた訳でもないんだし……認識を搅乱……何か一々面倒くさいから不可視状態とでも名付けておこう。

不可視状態なら見つかることはないだろ？ せっせと行くところ。

とーちやく！

まさかあの森から数分で学校まで行けるとは……しかも周りに与える影響を考慮してスピードを抑えた状態でこれだし……

でも篭は星の化身な訳だしむしろこの程度の能力は妥当なのかな？

まあとりあえず学校には誰にも見つからず無事着いたんだけど、広い……

マンモス校つていつても限度つてものがあるだろ？……

こんなんじや瑚太朗がいるかどうかの確認だけでも一苦労だよ……

「もういい加減、我慢ならねえ……」

あれ？ 聞き覚えのあるこの声はもしかするともしかする？
声の聞こえる方へと駆けつけてみると不良？の吉野が瑚太朗に
食つてかかつていた。

ひょつとしたらこれは丁度原作が始まった時期なのかな？
だとしたらラッキーだな。オカ研には入りたいと思っていたし。
瑚太朗がオカ研に入部しなかつたら他のメンバーも入らないだろ？
し、
瑚太朗が入部するまでは原作から外れないように気を付けるとしょ
う。

「残念だよ吉野……親友同士で争うことになるなんてな」

おっと、考え方をしている間に話が進んでるな。

「テメェと親友になつたつもりはねえ！
そいつを今日、体に理解させてやる」

人も集まつてきたみたいだし、ちよつと実験でもしてみようかな。

「さやー。天王寺君と吉野君どつちが攻めでどつちが受けなのかな
らー。」

ふふ。女言葉で喋るのはまだちょっと精神的にくるものがあるな……
まあ今の俺はどう見ても美少女だしその辺は
慣れていかないとしようがないか。

「え……どうしても言わないと駄目か？」

瑚太朗が顔を赤くしながら言つと話を

聞いていた数人の女子の顔から鼻血が！？

自分で煽つておいて何だけどまさか鼻血を
出す人がいるなんて思いもよらなかつたよ……

それと瑚太朗。吉野をいじりたいのは分かるが、
これから吉野とのB・L・チックなものを妄想されるんだぞ。大丈夫な
のか？

吉野いじりだけのために何か大事なものを失つて
しまつてはいるような気がするんだが……

まあそれはいいとして、瑚太朗は俺に気づいてないみたいだな。
中身が変わつてはいるからなのかどうかは分からないうが、
特に何もしていなければ瑚太朗には気づかれないようだ。

「おい天王寺、それじゃお前と俺が付き合つてるみたいじゃねえか
！」

なら後の問題はガーディアンにいる俺を見る」とのできる奴くらい
だな。
ガーディアンの中でも不可視状態の俺を発見できる奴はほとんどい
ない
はずだし、今度暇な時に西九条先生辺りを尾行でもしてガーディア
ンの
情報を入手してこよう。

「…放課後だ。忘れるんじゃねえぞ」

「ああ、理解^{わか}つてはいる」

あれ？ B-L方面に誘導したのに考え方をしている間に本筋に戻つてるよ。

ま、まさかこれが世界の修正力というやつか……
何て冗談は置いておくとして、この後は特に
イベントはなかつたはずだし今日はもつ帰るかな。

さて、住所不定無職な現状を変えるためにも
明日は奴の所に行くとしよう……

「といひ訳で、今日は神戸家の朝食の席にお邪魔してま～す」

やつぱり事情を知る協力者が必要だよね。といひ結論に達したので、今日は小鳥の協力を取り付けにやつてきました。小鳥と協力すれば寝床、協力者、和みと色々な特典つき。これは協力しない手はない！まあ実際ここで軽く事情を話しておかないと、ドルイドの使命で青春がぐつちゃぐつちゃになるだらうし、今の状態ならもう少しひらつ必要もないからね。

「あ、すこませんけど」飯のお代わりお願ひします

図々しくも理香子さん（小鳥の母親）に「飯のお代わりを要求しておつます。

……勿論小鳥じゃなくて私がだよ～。

小鳥さんはまだ寝ておられるようです。
全く寝ぼすけさんめ

…… さすがに は無いかな。

とりあえず敬語メインならあんまり違和感ないし、
基本的に敬語を使いつつ、男口調を出さないよう気を付けよつ。

ちなみに理香子さんはどうやら私の願い（命令）は
聞いてくれるみたいで。動力源にパワースポット使つてゐるからかな？
まあ都合がいいので良しとしよう。

「朝^{あさ}」飯を用意して

お、「じじ」とひやく小鳥が登場！

「ひひを見もしないで冷たく言い放つてゐみたいだけビ、
やつぱり魔物とこいつとで線引きしちゃうつてこいつのかな？

「それと今日から泊りがけで森に行つてくるから、
明日の夜まで」飯の用意はしなくていい」

たすがにそろそろ口を挟まないと小鳥が無駄な行動を取つてしまつ
ね。
さて、記念すべき第一声は～

「その必要はあつません

何かあつちの篳つぽくなつてしまつた。
まあ敬語キャラで行くとなるとあつちの
篳つぽい喋り方になるのもじょひがないか。

「え！ 何で鍵が家に！？ しかも喋つてゐし！？
一体何が起こつてるの！？」

お～混乱してゐる混乱してゐる。

まあいきなり家に鍵が居たうぢつゝするよ。

「家に来たのは少し状況が変わつたからです。
後、残念ながら夢ではありますん」

何でいつても今までの篳とは別物になつちやつたからね～

「ちなみに私の名前は篭なので今後はそう呼ぶよつこ

さすがに鍵呼ばわりはちょっとやめてほしー。

「あ、はい分かりました。つて名前の事はどいつもいいですけど状況が変わったということは?」

「どうでもいいなんてひどい!」

とまあ名前の件は置いておくとしてやっぱり状況の変化の方が気が気になるか。

では、説明タイムをスタートさせますか。

「状況の変化というのは私が知性を獲得したことです

本当のところは別人になつただけなんだけど、まあ話がややこしくなるしそこは言わなくていいかな。

「知性を獲得したことで自衛能力も向上しましたので、もう私を守る必要はありません」

実際、原作でも篭に自衛する気があつたならそう簡単には殺せないだろうしね。

「守らなくていい、ということは私はドルイドの使命から解放されるんですか?」

「解放か……

やつぱりドルイドの使命とか面倒なだけだよね~

「そういうことになりますね。それと敬語は別に使わなくていいで

「あよ

何か小鳥が敬語を使つてると、違和感があつて妙に落ち着かない。

「分かりまし……分かつたよ」

「これでよしー

「では、今日からここ泊まるので部屋の用意をお願いします」

わづげなくじちらの要求を伝えてみた。

「へ?」

やはり流れに乗つて有耶無耶のつけこ
泊めてもいひのは無理があつたか……

「ですから、住む所がないのでここに住みます」

もしかするとOKが貰えるかもしれないのでもう一回囁いてみた。

「ええと、突然そんな事を言われても小鳥さん困っちゃうんだけど
よひじい、なじまじからは交渉の時間だ。

やつぱりそう簡単にはいかないか。

「瑚太朗がちよつと危険そうでしたので、ボディーガード
でもしてあげようと思ったのですが…」

とつあえず瑚太朗をえさにしてみる。

「部屋は余つてこののでどうせいい理由にお使つて下さい。」

交渉タイム終了

つていうか変わり身早つ！

しかも何が危険なのかとかも聞いてこないし。

「いいんですか？ 正直こんなにあつさつと
決まるとは思つていなかつたのですが……」

「いひつていひつて。嘘つこてるよつても見えないし

まあ確かに嘘はついてないね。

瑚太朗にもそこそこ死亡フラグはあるじ。

「では今日からここ泊まりせつもらこますね」

……何かえりくあつやつこつたけど、これで寝床ゲットだぜ……

10月03日(田) 小鳥、一芝居打つ

「怒られたやうと思つたが、耐えり」

お、瑚太朗の声がする。

ということはようやく小鳥たちが帰つて来たか。

中々待ち長かつたな

こんなことなら戻つてきたら知らせてくれるよに
理香子さんに頼んどけばよかつた。

……え？

時間が飛びすぎていて訳が分からぬ？

まあ実際あれからあんまり特別なことはしてないよ。

居候になることが決定したから色々と必要な家具を買つたり、
何故瑚太朗が危険なのかを小鳥に説明したり、今の状況を作り
出すために話し合いをしたりしただけだし。

ちなみに今は夜で、さらに言つと森から帰つてこなかつた小鳥を
瑚太朗が探し出して來たところだね。

何故小鳥が森に行つたかと云うと、もつ今後あまり森には行かない
だろから、夜遅くに帰つて理香子さんに森への立ち入り禁止令を
出してもらつて、自然と森との接点を断つという作戦のためだ。
どう見ても自作自演だけど、そこは気にしない方向で。
さすがに瑚太朗が気づく訳はないし。

「家出するならひつひ来い。部屋あいてるから」

「大丈夫。神戸家は放任主義だから」

「そつか？ さすがにこの時間じゃ大目玉だろ？」

後、瑚太朗が危険な理由としては予知能力で危険な未来が見えた、
という事にしておいた。まあ嘘なんだけど、あまりうまい説明が
思いつかなかつたからしょうがない。さすがに予知能力に関しては
完全には信頼して貰えなかつたので、明日ちはやが転校してくるのを
うまく予知つぽく利用して納得してもらおう。

「それがあんた、うちときたら…」

「小鳥さん、戻りましたね」

「おわつ…」

理香子さん出現。つていつか瑚太朗はちょっと驚きすぎだろ。

「あ、ただいまよ、おかーさん」

「大事ないようですね」

「うん、もちろんだよ。森は庭みたいなものだもの。
快適すぎつい寝落ちついたよ」

とりあえず今の時間から考えると寝ではないと思つ……

「……小鳥さん、森に入るにあたつて私とした約束を覚えていきます
か？」

「ええと…」

「どうやら覚えていないようですね……」

「遅くなる場合には連絡を入れること」

「あつ…」

「どうやら思い出したようですね。

ですが、さすがに連絡もなしにこんな
時間まで帰つてこないとなると……」

理香子さんが悩んでいるようだ。（演技です）

「小鳥さん、今後一ヶ月は森に立ち入り禁止とします」

よし、これで小鳥が森に行かなくなつても何う不自然じゃない。
そして理香子さんは瑚太朗に視線を移した。

「よく働いてくれました」

瑚太朗は下男のように頭を下げる。

「へえ。すいやせん、予想外に手間取っちゃつて」
「いいえ、ご苦労様でした」
「おかあさんおかあさん、瑚太朗君はいい仕事をしたよ。
どーんとお礼してあげてよ。どーんと」

理香子さんは瞑想するように目を閉じた

「…いいでしょ」
「ほうびて…」
「何か？」
「ありがたくちょうだいいたします」
「結構。では小鳥さん、帰りますよ」

しゃなりしゃなりと去つていく……のはいいんだけど。
二人ともちょっと明るすぎない?
まあ瑚太朗に疑われないなら問題ないし、
そこまで気にしなくてもいいかな?

「んで…。

結局叱られたみたいだけど、明日は学校来れるか？」「

「うん、行くと思うよ。休んでばっかりもいられないしね。

それに今回の件は私が約束破っちゃったからしょうがないよ~」「

「そつか。まあ小鳥が落ち込んでないなら別にいいけど」「

「ま、立ち入り禁止つていっても一ヶ月だしね」

「OK。んじゃまた明日学校で」

「うん、おやすみ~」

小鳥は両手をじぎじぎと開閉しながら、理香子さんのあとを追つていった。

「… 一仕事だつたな」

では瑚太朗のオカ研入部フラグを立てるために、
こちらも一仕事するとしよう。

今まで全然出番なかつたし、ここからはずつと私のターン…！

「弓きあげるか」

じーっと瑚太朗を凝視する

「……ん？」

さらじーっと瑚太朗を凝視。

「…まさか」

全然何も感じなかつたらどうしようかと思つたけど、

瑚太朗はちゃんと視線を感じているようだ。

「帰るか…」

「ここでさらにダメ押し！！

瑚太朗の背中に向けてリボンを射出！
あ、もちろん威力は最低にしてますよ。
普通にリボンを放つたら瑚太朗死んじゃうし。

「…え？」

瑚太朗が振り返る。

「……っ」

瑚太朗がダッシュで帰った。

よし、後は寝込みを襲うだけだな。

これで瑚太朗の才力研入部フラグが立つはず。

… そういえば瑚太朗の家ってどこだろう？

瑚太朗はもう見失つてしまつたし。

…… しようがない。小鳥にでも瑚太朗宅の場所を聞いて
本日の最終イベントを終わらせてくるとしよう。

10月04日(月) りむせらる

「おはようつ籠」

朝田覚めてリビングに行くと何と理香子さんが挨拶してくれました！小鳥は無視するかもしないけど、私としては無視をすると心が痛むのでとりあえず理香子さんに朝の挨拶を。

「おはようござります理香子さん」

ただ、挨拶してくれるのはいいけど今いち感情が読み取れない。小鳥ルートの最後の方で普通に受け答えしていたように見えたのはやっぱりただの反射なのかな？ちなみに篠という呼び方はいつからお願いしてみました。ちゃん付けはちょっと嫌なので呼び捨てということです。

「…わかった。じゃ今日は先に行くわ
「すまないねえ」
「…一応確認するけど、実は体調悪いとか？」
「うんにゃ。気分は悪くないんだけど…爆睡しちまつたい
「昨日あんな昼寝しどってなあ」
「面田ない」
「ん。じゃ、またあとでな」

お、小鳥は瑚太朗と電話で話しているようだ。ちゃんと昨夜二人で話し合つたように寝過ごしたという設定で会話してるね。小鳥が普通に登校しても今日の出来事は変わらないかもしないけど、

念のために原作と同じ状況になるようにしておいた。

今日は小鳥に予知能力を証明する日だからイレギュラーはとりあえず排除。

後は、ちはやが木から落ちる「ひなび」を予知していく形で先に伝えておけば問題ないはず。

ドタドタと階段を降りる音がして小鳥がリビングに入ってきた。

「おはよひびきます小鳥」

やつぱり朝の挨拶は大事だよね、といつ事で小鳥にも朝の挨拶を。

「おはようだよ篠ちゃん」

ぐはっ！

篠はちゃんと付けされたことによりーーのダメージを受けたところのは冗談としてもちゃんと付けはまだちょっと勘弁してほしい。

「小鳥。ちゃんと付けは止めてもらいたいのですが……」

「何か呼び捨てはしつくつこないんだよ」

まあ確かに見た田は年下みたいなんだけどね。

「それにしてもつまくやつたみたいですね」

「うん。昨日言われた通り寝過ごしたといつことにしておいたよ。ところで今の言ひ方からするともしかして会話内容を盗み聞きしてたり？？」

「盗み聞きとは失礼な！ あれくらいの声の大きさならそのようなことをせずともこの場から聞き取れます」

「余計ひどいよつー」

「大丈夫です小鳥。普段はそんなことはしていませんから」

さすがに少しば意識を集中しないと聞き取れないし、別にプライバシーの侵害までする気はないからね。

「ならいいんだけどわ」

どうやら小鳥も納得してくれたようだ。

「それではもう少しあしたら学校に行くとしますか」「わかったよ」

1時間後

「では小鳥は教室に少しそり侵入してください」「うじやー」

小鳥が元気に返事をする

「今は授業中ですしあう少し静かにしておきなさい」

「あ、ちなみに小鳥には分かりづらいかもしませんが、今私の姿は小鳥以外には見えていませんから、傍から見ると独り言を話しているおかしな人ですよ?」

実際周りに人が居たら生暖かい目で見られていたろう。

「それは先に言つておいてほしかったよ篝ちゃん!…?」

「だからちゃん付けは止めてほしいと……」

はあ… もう好きに呼んでください……」「

小鳥の説得はちょっと難しそうだ。

まあこれから小鳥以外にも呼ばれる事もあるかもしれないし、
その予行演習と思って大人しく受け入れておこう。

「 そうそう、人間諦めが肝心さね」

「 私は人間ではないですけどね」

身体は魔物、心は人間。

その名は、星の化身篝！！

「 そういうえばそうだったね」

あれ？ もう私が鍵つてことを忘れてらっしゃる？

「 ここ数日の篝ちゃんの生活態度を見てたら
そんなことすっかり忘れてたよ」

まあそこは元人間ですから。

「 それでは無駄話もここまでにしてそろそろ行きなさい小鳥」

「 りよーかいだよ」

「 私は別に行くところがありますから昼休みにまた合流しましょう」

「 じゃあまた後でね～」

「 はい、ではまた後ほど」

小鳥と別れて一人取り残される。

さて、今のうちにオカ研の場所でも確認しておくかな。

確か5Fのはずだし、一フロア程度なら楽に探し出せるだろうしね。

……まさかこんなに早く見つかるなんて。
まあ今の所は特に用事はないけど、教室に戻つても授業があつて
だらうからしばらくここで休憩しておこうかな。

はつ！

いつの間にか眠つてしまつてた！

えーと今の時間は。うわっ！ もうすぐ昼休みだ。
急いで教室に戻らないと。

「…小鳥」

瑚太朗が小鳥を昼食に誘いたそうな目で見ている。
ふうー何とか間に合つたみたいだ。

「ん？」

「ランチ、俺もここで食つちゃだめ？」

「いいけど…お弁当持つてきた？」

「…ひとりメシ行つてくら」

「いつてら」

瑚太朗……誘う前に食べる物が無いことに気付こうよ……
まあ予定通り瑚太朗も外にご飯を食べに行つたみたいだし、
こちらも予定通りに動きますか。

「では小鳥、私たちも行きますよ」

「くくくと頷く小鳥。

小鳥を伴つて廊下に出て、誰もいないことを確認したので小鳥と手
を繋ぐ。

「これで小鳥も周りからは認識されなくなりましたから、
もう喋つても 大丈夫ですよ」

「それでこれからどんなイベントがあるのさ?」

「転校生が降つてきます」

「W h y?」

「ですから文字通り転校生が降つてきます。
まあ実際に見た方が分かりやすいですね。

という訳なので校門付近で適当に話でもしながら時間を潰しまし
ょう」

移動中……

「ではちょっと口裏合わせをでもしておきましようか」

「口裏合わせ?」

「はい、これから数日内に瑚太朗がオカルト研究会、通称オ力研に
入部

しますから、護衛の件も考えて私も入部しようかと思いまして」

「ふむふむ」

「そういう訳なので、小鳥と私はボランティアで知り合つて
気が合つた親友という設定にしておきましょう」

「それから細かいことを聞かれたら詳しいことはあまり知らない」ということで乗り切つてください」「うじやー」

「わあああ――――つ―?」

がさがさあーつ！

「はい、そういうしていのうちに転校生が降つてきました」「ええ！？ 降つてきたつて一体どこから？」
「さあ？ あの崖の上からじゃないですか？」
「転校生さんは大丈夫なの？」

まあ、ちはやは物凄い耐久力を持つてるからね。

「転校生は頑丈なので大丈夫です」「あの高さから落ちてるのに頑丈で済ませるの！？」
「まあ細かいことは気にしない方がいいですよ」

ちはやはだし。

「では私の予知能力は本物といつ」とドドいですね?」

ちはやは落ちてくる事までピンポイントで当てたし、
まあ大丈夫だろう。

「うーん。確かに見た感じ仕込みとかじゃないみたいだし……わかった。予知能力のことも信じるよ」

よし、予知に關しては信用してもらいたみたいだ。

「では、私はやる事がありますし今日は帰りますね」

「じゃあまた家でね～」

小鳥がふんふんと手を振る

「はー小鳥、一回とよつなりです」

私も負けじと手をふんふんと振つて小鳥と別れた。

……それで、じゃあ後は家で社会情勢の勉強をしたりネットサーフィンしたりゲームしたりアニメを見たりしよう

10月05日(火) 篠ちやん暇を持て余す(前書き)

今回登場する記号は、

『』が小鳥にしか聞こえていない状態の篠の声
ゝゝは小鳥がノートに書いた文字となっています
普通の「」だと会話文と見分けがつけにくいと
思つたため上記のように使い分けました
尚、二人揃つて不可視状態になっている場合は
通常の「」を使用しています

以上の事を踏まえた上で本編をお楽しみ下さい

10月05日(火) 篠ちやん暇を持て余す

「暇だ……」

小鳥は学校に行つたし…
小鳥がオカ研に誘われるまではオカ研メンバーとの接触は避けたい
し…

よし、接触はできなくても見てるだけでもきっと楽しいはず!
今日はちはやはが転入してくる日だし、ちはやはと瑚太朗の夫婦漫才を
見てれば暇つぶしになるさ。

「という訳で来ちゃいました」

「来ちゃいましたで……」

呼び出された理由が暇つぶしだと知った小鳥は呆れ顔だ。

「まあいいじゃないですか。どうせ小鳥以外には見えないんですし
「私に見えるつてのが問題なんだけどね…。
いい!? 授業中は邪魔しないでよ?」
「それは授業中に邪魔をしり、というフリですか?」

押すなよ! 絶対押すなよ! 的な?

「違うよー?」

「まあ冗談ですからそつ気にしないでください」

さすがにそんなひどい事はしないよ。

「では、私の目的も伝えましたし、教室に戻りましょう」「暇つぶしは目的つていうのかな……？」

小鳥のつぶやきが聞こえたが、そこはスルーしつつ教室に入る。そしてしばらぐすると寝癖全開の瑚太朗がやって来た。

「おはよー小鳥」「おはよう瑚太朗君」「それにしても今日は随分遅かったね？」
「ああ、それなんだが聞いてくれよ小鳥。俺はセツトした目覚ましにより時間通りに起きたわけさ。でもまだ眠い、時間的にもうちょっと眠つても大丈夫という誘惑に負けちゃって……」「一度寝しちゃつたんだね」

あるある。一度寝つて遅刻何かの危険があるけど中々抗えないよね

「というわけで今日は危うく遅刻しかけた」「へー」「じゃあこれ寝癖？ 新しいヘアスタイルかと思つた」「ん……」

これだけ斬新なヘアスタイルは存在しないと思つ

「うへー寝癖直してると時間が全カットだったかんねえ……」「……」

吉野が瑚太朗と雑談をしたそうな目で瑚太朗たちを見ている。
……嘘だ。

「なんだ、楽しげな朝の会話には入ってこないのか」「つるせえ」

「なんか、吉野君、サムライっぽい」「そうか？」

「……」

「赤ジャケットの人の仲間っぽい」

「あー、なんとなくわかる。鉄斬る人な

似てるかな？」

「ちょっと口元緩んでね？ 嬉しいんじゃね？」

「うぜえ。黙れ」

おっとチャイムも鳴つたし朝のHRが始まるよつだ。邪魔にならない位置に移動しておこう。

チャイムの直後に担任と思われる人物が教室に入ってきたが、生徒たちは席に戻らずに、雑談を続けていた。

皆の話題は一点。昨日来るはずだった、「転校生」についてだ。

「転校生さん、今日も来てないのかな？」

「センセーなりの演出じゃないかな」

「えー、気になるなあ」

「まあ、俺は昨日会つてゐるけどさ」

「え、そつなの?」

『中々の演技力です小鳥。演劇部にでも入つてみたらどうですか?』

他の人には聞こえないのをいいことに普通に小鳥に話しかける。ちなみに小鳥にはできるだけ原作通りの行動を取つてもらっている。

何がきつかけで原作から外れていくか分からぬからね。

「会つたつつても坂で会つて職員室まで連れて…

まだ職員室で会つただけだな」

「おー、じゃあ鳳さんのエスコート第一号は瑚太朗君だねえ」

「はつはつは。

あれ？ 何で小鳥が転校生の名前しつてるん？ 「

小鳥はしまつた、という顔をしているが時すでに遅し。

「え！？ それは…あれだよ！ アカシッククレコードにアクセスしたんだよ！」

「そんなどうでもいい事でアクセスしちゃったのか…？」

『これはまた壮大に話を盛りましたね』

「で、本当のところは？」

「友達に聞きました…」

「友達！？ 小鳥つて俺以外に友達いたの！？」

「むつ！ 瑚太朗君それはちょっと失礼すぎるんじゃないかい

「私には友達の100人や200人…」

「マジで！？」

「…は言いすぎかも知れないけど、とにかく友達ぐらいいるよ…」

「へえ。それは知らなかつたな。」

「ところでその友達つて俺も知つてる奴？」

「…ううん。瑚太朗君は会つたことないはずだよ

小鳥が微妙な表情になつてゐる。

まあこの話題はちょっとまずかったね。

「はいみんなーん。席に着いてください。始めますよー」「はーい」

『小鳥。教室のようにたくさん的人がいる状況下で私と話したい場合、私に伝えたいことを頭の中で念じてください。そうすれば私に伝わりますので』

と言つてみたら、小鳥がむむむつといつ感じで集中しました。

『まあそんなテレパシーのような能力は私にはないんですけどね』

と私が付け加えると小鳥はずるつと椅子から滑り落ちた。

「情けねえほジボ「ボ」にして、テメエ自身を転校生にしてやるつ
か？」

お、瑚太朗と吉野が注目を集めてくれていたおかげで椅子から滑り落ちる
シーンは見られることはなかつたようだ。
だがしかし、小鳥がこつちを睨んできている。
さすがにちよつとからかい過ぎたかな？

『ちよつとしたお茶目な冗談ではないですか』

そう言つとやれやれ、という感じのモーションを取つたし許してくれたようだ。

「吉野くーん、ちよーと静かにしてねー。ホームルームを始めまーす」

「ちッ、邪魔が入りやがる……」

ホームルームの出席確認が始まった…。またしても暇だ。小鳥に話しかける

ことはできるけど小鳥は喋れないからこいつちが勝手に一方的に喋るだけに

なっちゃうし……。そりだ、いい事を思ついた！

『小鳥。暇なので何か話でもしましょ？』

『小鳥は喋らなくてもいいので、ノートに小さく喋る内容を書いてください

私の眼を持つてすればノートに書かれた内容を読むなど容易いことです』

『何ていう能力の無駄遣い！？ まあ私も暇だしやつこいつことならOKだよ』

よし、小鳥が乗つてきてくれた。

正直授業中に話せないんじゃ暇だからね。

『では何の話をしましょ？』

『じゃあ今話題になつてゐる鳳さんの話でもどう？』

『いいですよ』

『せういえば篠ちゃんは鳳さんのこと知つてるの？』

『そうですね、知つてゐるといえれば知つていますね。』

『といふと？』

『予知で見たので人となりについては多少は分かります』

実際にはゲームだけだね！

へえ。じゃあ鳳さんってどんな人なの？

『そうですね、一言で言うなら天然さんですね』

> 天然なんだ…… <

『何でもない所で転んだり、人の後ろに着いていくだけで迷子になつたり』

「おおう、そいつは予想以上の天然つぱりだね！」

『ちなみにちはやはオカ研に入部する予定なので、これ以上の事を知りたい

地盤は実際に力^ハを發揮してゐるが、これ

八五
䷠

『さて、そろそろちはやの紹介が始まりそうですね』

「じゃあ、こじで転校生を紹介しまーす。

昨日
一
日期待をせ
ぢ
ま
し
た
か
ー
?

てはるゝな 手手で盛入にお送りく も

車輪生れとおはなし

どよどよと色めく教室内に、今、ついに、ちはやが現る！

「天王寺ぐるん、ネタばれ敵禁ね!!」

「天王寺？」

瑚太朗が微妙に睨まれてる。

の、おまけに小鳩がその事に気付いたよ」と

「湖太朗君は河で睨まれてるの?」

『やつですね……。話せば長くなる……」)ともないのでですが簡潔に言つ
と

卷之三十一

『湖太朗がいつものノリで接した所、第一印象が最悪になつたみたいですね』

^良く分かったよ^

「じゃあ、元気よく自己紹介をみんなにね
て、転校生の鳳ちはやはです……よろしく……」

「よろしく……」

名前の分からない男子生徒Aがハイテンションで返した。

「誰がホモだテメH-！」

「やべえ！ そうなつたらお相手俺しかいないじゃん！」

瑚太朗たちは相変わらずマイペースに騒いでいた。

^ところで瑚太朗君たちは何やつてるの？^

『さあ？ いつもの『//コニケーション』じゃないですか？』

^それもそうだね^

「ちなみに制服については事情があつて、しばらくのままだそつ
でーす。

あまり深く詮索しないであげてね。

じゃ、席は…とりあえず、次の席替えまでは[定番の一一番後ろかし
ら]

「あ、はいです」

「じゃー、正面のほうが見やすいわね。

えーと、天王寺君の後ろでいいかなー？」

「ええっ」

瑚太朗が席を後ろに少しずつ移動をせている。
まあ所詮無駄な抵抗なんだけどね。

「あら… よく見たら天王寺君の後ろついて、
スペースの空きが少ないのかしら?」

じゃあ、吉野くん…」

吉野も瑚太朗と同じように席を後ろに移動させてる。
どうにしろ瑚太朗の後ろになると思つけどね。

「あらら… ?

「しようがないわねえ」

天王寺君の隣にしましょ。もう顔見知り
みたいだし、色々世話してあげてね」

「「ストーップ!!」」

「な、なあに? いきなり息ぴつたりね…」

「いや、後ろ空けますから…」

「吉野君も席を元の位置に戻しておいてくださいねー。」

じゃ、連絡事項を…」

先生が連絡事項を黒板に書いている間にどうやら例のあだ名? を

瑚太朗が言つてしまつたみたいだね。

がたあつ!!!

ちはやが片手で机を持ち上げた!!

何と小鳥も現場を目撃していた。

「えーと、今のは?」

『言い忘れてましたが、ちはやはかなりのパワーファイターです』

「おう…」

『そついえば小鳥、ホームルームが終わったら教室を脱出しますよ』

「なして?」

『予知関係…とだけ言つておきましょ』

♪予知関係か…。了解だよ♪

ホームルームが終わると、早速生徒達がちはやの周辺に集まっている

『では教室を出ましょ』

小鳥がこくこくと首肯するのを確認し、教室を後にする。小鳥は少し間を置いて出てきたので、周りに人がいないことを確認して手を繋ぐ。

「ふう、これでようやく普通に会話ができますね」
「だね。私はちょっと腕が疲れちゃったよ」

おっと、それは考慮してなかつた。

「すみません。私の暇つぶしが原因でそんなことになつてしまふなんて…」

「別に気にしなくていいよ。疲れたといつてもちよつとだし、ホームルームとかの場合だと私も暇だしね」

「そう言つてもうるさいと助かります」

「それで、予知関係つて今から一体何が起きるの？」
「それはですね、瑚太朗がちはやに学校案内をします」
「それだけ？」

「ええ、それだけですが？」

「なら私が教室を出る必要は無かつたんじゃ……」
「甘いですね小鳥。大甘です。」

小鳥が教室に残っていたら瑚太朗は学校案内を小鳥に任せると

よ「う？」

「あつー。」

「つまつわつこいつ」とです、

「じじじ小鳥が案内しかやうと色々狂つちやうかもしれないし。

「予知じつこてはとりあえず干渉しなければ問題ありませんので、
画面をうわすじこつやつと一人を追跡してみませんか？」

「お主もワルよの」

「じじやう」解してくれたみたいだ。

「では一人も教室から出てきたようですし、早速尾行を開始しまし

よ「

「じじやー」

「元気よく返事する小鳥。じじやう小鳥も楽しんでるようだ。

「なんで、よりによつてあなたなんですか
「ですよねー…はは」

「険悪な空気が流れている…。

「鳳さん、あれが2・Bの教室ですよ」

「見れば解ります」

「ですよねー」

「一人とも無言で進んでいく。

「なあ、鳳」

「正直さ、俺も本当に悪かつたって思ってるんだ…」「その後の態度も悪かつた。ちょっと改めるからさ…」

瑚太朗が振り返り。

「『めんつ！』

頭を下げる。

「瑚太朗君は一体何をやつてるのさ」

「瑚太朗もまさか今まで後ろに居た人が突然
いなくなつているとは思わなかつたんでしょ」

「ちひは和やかに談笑しながら進んでいる。

「いねえ…！」

「ようやく気づいたみたいですね」

「瑚太朗君…」

「おーい、鳳ーー」

「あつ！ ど、どに行つてたんですかっ」

「そいつは見事にこつちのセリフだな…。

何ですぐ後ろにくつついて来てて迷うんだよ」

「ちょっとよそ見してる間にいなくなつてたのはそつちですっ。

「う…またしても屈辱です…」

「いやー、悪意はないんだけどさ」

瑚太朗思いつきり睨まれてます。

「…行きますか」

「あ、待ってください」

「ん」

「あそこ」に見えるの、なんですか？」

ちはやが窓の外を指差す。

「ん、どれ？」

「ああ、ありや 体育館だよ」

「たいいぐかん… へー、もうなんですか」

「ちょっと珍しい形してるよな。でも中は割と普通だよ」

「そうですかー。

「じゃ、さつやと案内してくださー」

「あ、はこよ」

すたすたと一人は別の場所に歩いていく。

「では、気分転換も済みましたし私はそろそろ帰るとしましょー」
「えー？ 」の後は見ていかないの？」
「小鳥……。覗きなんて趣味が悪いですよ？」
「先に誘つてきた篠ちやんに言われる筋合いはないよー」
「まあまあ、冗談ですしそんなにむきにならないでください」
「そつか…。確かにこんな中途半端な所で急に帰るなんて[冗談だよ
ね」

「では小鳥、一回やよつなりです」

「そこは[冗談じやなかつたのー?」

暇つぶしは」のへりここして、」れ以上
引き止められる前にわかつたと帰るとじよ。

……今日は帰つたら何をしようかな

10月05日(火) 築ちゃん暇を持て余す(後書き)

もつと短くする予定が書き始めたら
かなりの長文になってしましました。
今後はここまで長くなりそうだったら
途中で分割するかもしれません

10月06日(水) フーキーン現る!

『暇なので、以下略です』

今日は寝過(?)してしまったので、現時刻は昼休み間近だ。

ヘモニは略さないでちゃんと書おうよ…。^

やっぱり今日も今日とて暇だったのと小鳥に会いに、そして瑚太朗観察のためにも学校にやってきてみた。

キーンコーンカンコーン

『さて、チャイムも鳴りましたし恒例の瑚太朗ストーキングを始めるとしましょう』

^しおうがないなあ^

よし、勧誘成功。まあ何だかんだ言つても毎回一緒に行つてくれるし、

小鳥もやっぱり瑚太朗の日常生活が気になつてゐみたいだね。

あ、瑚太朗が早くも席を立つてどこかに行こうとしている。

『もう瑚太朗は教室を出るみたいですし、早く追いかけましょ^』

小鳥が領き、二人一緒に教室を出て瑚太朗のストーキングに移行する

「しまつた、出遅れた…」

窓の外を眺めながら歩く瑚太朗。

そしてそれを追いかけるストーカーが一人。

「あ

お、ちはやを発見したみたいだ。

「危険回避だな」

瑚太朗はもと来た道を早足で引き返し始めた。

「今のはどう見ますか、解説の篠さん」

何か小鳥が妙なノリになつてゐる…
まあここは付き合つておくとするか。

「そうですね、今窓の外に居たちはやはを発見したようですし、危険回避という言葉から推測すると、恐らくはちはやはに絡まれて唇」飯を食べそこなうといつ事態を想定したのでしょうか」

「なるほど。的確な回答ありがとうございます」

「角を曲がつたところで歩調を緩める瑚太朗」
「しかし、その背後には怪しげな影が……」

「何か篠ちゃんもノリノリみだいだね」
「何かも何も私は最初からノリノリですよ?」

「で、篠ちゃんはあの子の事は知ってるの？」

「無論です。私の情報収集能力を甘く見ないでください」

「彼女は静流。未来のオカ研メンバーの一人で、高性能な後輩です」「性格としてはやや素直すぎるところもありますが、中々いい子ですよ」

「なるほどねえ。あの子もオカ研メンバーなんだ…」

「ところで今まで聞いたオカ研メンバーって

女子しかいない気がするんだけど…」

「ええそうですよ。ちなみにオカ研メンバーは総勢6人で瑚太朗以外全員

女子です。なので私の中ではオカ研は天王寺ハーレムという認識です」「ハーレムなんか…」

小鳥がショックを受けているようだ。

「瑚太朗君えろえろだよ！」

小鳥の中での瑚太朗への好感度が下がった！

ふびー

調子はずれな笛の音がする。

ふす　。

今度はかされた音。

「むむ…」

「ところであの子はさつきから何してるのかな？」

「笛の音で気づいてもらいたい気分なんでしょう……多分」

別に喋れない訳じゃないし、その辺が妥当かな。

「えーと…」

「何をしているんだいお嬢さん」

「む…」

「見せてみな」

ちよつと待つた、と手で示し、水道へ笛を洗いに行つた。

「篝さん、今度の行動は一体どういふことなんでしょうか?」

「一田乗つておいて何ですけど、まだ解説じつじを続けるんですか

…

「しようがないですね。えーとこれはあれです。笛を渡した瞬間に瑚太朗がいきなり関節キス狙いで笛を嘗め回す事を警戒したんでしょう」

「何がわつわつから瑚太朗君への評価が酷くない!?」

「まあ本当のところは瑚太朗に渡す前にきれいにしただけでしょう」

「ぶーぶー。つまんなーい」

「小鳥は一体どういう解説を望んでいるんですか…」

「なるほど。お名前は?」

おつと、解説者じつじをしてくるひびきの話が進んでいたようだ。

「静流だ」

「身長は?」

「…」

1-4-9と両手で表す。

「体重」

「……」

3・9と両手で表す。

「スリーサイズ」

「むむむ……」

「瑚太朗君……」

体重とスリーサイズを聞いてしまったことで
小鳥の好感度がさらに下がってしまったようだ。

「ね、素直ないい子でしょ?」

「確かに素直ないい子なんだけど、私としては危機感を覚えるよ」

まあ確かに普通の子なら心配だけど、実際静流に勝てる奴なんて
ほとんどいないだろうしなあ。

「大丈夫です。静流はかなり強いですか?」
「強いつて一体どのくらい強いの?」

「静流の強さか……」

とりあえずかなり強いといつことしか分からない。

「まあとつあえず、ちびもすをーとするなう……」

「するなら?」

「100くらいのものではないでしょうか?」

実際どうなんだろう？

まあちびもすよりは圧倒的に強いんだろうけど。

「ええ！？ それはちょっと強すぎない？」

「ちびもすは普通の人じゃ倒せないくらいは強いんだよ？」

まあ本当のことなんだけど、静流がガーディアンの人だと
ばれると色々面倒そうだし、ここはいつもの冗談ということ
にしておくかな。

「まあそれは冗談としても、静流は護身術をやっていますし、
大人の男が襲つてきても普通に返り討ちにできますよ？」

「この程度なら一般常識の枠内に収まるだらつ。

「もつ！ 篠ちゃんは私に嘘をつきすぎだよ」
「まあまあ、冗談を言い合えるほど仲がいいと
いうことだし良いことじやないですか」
「それはそうなんだけどね…」
「ではこの話はおしまいということ」
「うーん。何かちょっと納得いかないけどまあいいや」

「ふう、何とか納得してもらえたようだ。

「それにしてもあんなに小さいのに大人の男でも
返り討ちにできるなんて人は見かけによらないねえ」

「まあ私だったら軍隊レベルでも返り討ちにして見せますが」

「篠ちゃん、妙な対抗心出して余計な事はしないでよ？」

「失敬な。私は戦闘狂ではありませんし、世の中平和が一番です。

見つかってしまった場合は正当防衛くらいしますが、自分から攻めるなんて……攻めるなんて……多分しません」「そこは断定してほしいんだけど……」「まあそこはケースバイケースです」

「お庭でおべんと一食べよう。ふたりで」「変わった罰則だな?」「むう……」

小鳥と話している間にまた大分話が進んでるね。

「小鳥と話している間にいつの間にか静流が瑚太朗をデートに誘つているようですね」「だねえ。全く瑚太朗君も隅に置けないよ」

「ひょっとして、最初から俺を誘つつもりだったんじゃないのか?」「まあ、別にいいけど」「じゃ、行くか」

静流が瑚太朗の方をちらちら見ている。

「どうしましたか静流さん」「……」

とことこと瑚太朗の後ろについていく。

「ああいうのを見ていると和みますね~」「そだね~」

「じゃあ十分和みましたし、私はそろそろ帰りますね」

「 そだね」

「あれ？ 今日は随分あつさり引き下がりましたね」

「これ以上覗き見するのは野暮つてもんさね」

「それもそうですね」

「じゃあまつたね～」

「はい、ではまた家で会いましょう」

……さて、もう少ししたら小鳥がオカ研に誘われるはずだし、
よしやく退屈から解放されそうだ。

『もう何も言わなくても分かりますね』

いつも通りの暇つぶしタイム！

小鳥はやれやれ…という風に嘆息している
もう放課後だし今日は来ないと思つていたん
だらうけど、やうは問屋が卸さん！

「瑚太朗」

『今ノートで会話するところのも難しいでしょ、
しばらくなは勝手に解説でもしてますので適当に
聞き流しておいてくださいね』

「よ、呼んでるんですけど…？」
「あ、いやー」

『どうせりこきなり前で呼ばれたの
で少し心惑つててこるが、前で呼ぶのは
なんなんですかさつきからその間は』

「様々な葛藤がね…」
「？まあこいです」
「で、なんですか…」
「…鳳さん」
「なんなんですかさつきからその間は」

『わはやを名前で呼んでいたところで、いつ
名前を忘れていたところで、いつでしょ、うな

「なんだね」

「…やつぱりじいこです」

『さつせしばらくつて言つたばかりで何ですが、一人解説はやつぱり虚しいので、そろそろ一緒に観察を始めませんか?』

「ぐぐぐくと頷く小鳥。

『ありがとう』『まます小鳥』

「じゃねー、『タさん』

「あれ、小鳥もう帰るの?」

「うん…ちょっとね」

そつそつ。じょっと瑚太朗観察の時間になつちやつたからね。

「…あ」

「えーと」

どうやらちばやは小鳥に話しかけたいようだ。

「?」

「小鳥に挨拶がしたいみたいだよ」

「いちいち解説なんていりませんつ! すぐ挨拶するんですからつ」

「ん、鳳さん…じゃあね」

「さ、さよなら…小鳥さん」

「え」

やつぱり最初から名前で呼ぶのは、

「ほつほー」

「じゃあ、ふたりで行つてくる事ー」

「じゃね、ちーちゃん」

「あ、はー。さよならです」

「おーい、なにそれ！？」

小鳥が教室を出たので、廊下で手を繋ぎそのまま教室の中へ潜入。

「あーもー…」

「うーむ」

「小鳥のやつに体育の時間、組む相手が出来るな…」

「む、失礼な。私にだつて組む相手くらいいのよー。」

「小鳥、今話しかけても瑚太朗には聞こえませんよ」

「それにしても小鳥に組む相手がいたとは以外でしたね。あ、まさか先生などとこうオチではありますよね？」

やつと小鳥はだらだらと汗かきはじめた。

「まさか図星なんですか？」

「あ、瑚太朗君が教室を出でていくよ。早くおわなきやー」

「話を誤魔化しましたね」

「まあこれ以上いじめるのも可哀想ですし、この話はここまでにして二人の後を追いましょう」

昇降口を抜けていく瑚太朗とちはや。だがどうやらちはやの方が遅れてくるようだ。

「ま、待つてくださいー！ 早いですつー！」

「あ、わりい」

「エスコート対象の歩幅に合わせていない。減点1ですね」

「今回は審査員風なんだ……」

「ええ、毎回同じでは面白くありませんからね」

「どうでもいいけど転ぶなよ」

「そつ、そんな心配してもらわなくとも大丈夫ですっ」

「だつてなあ……」

「これまでのはたまたまですかう」

「今日も見事に夫婦漫才をこなしますね」

「そだね。傍から見ると仲良しさんにしか見えないね」

「あれ？ 何か」手に別れたよ？」

「多分またちはやの天然スキルが発動したんでしょう」

「うおーい！」

ちはやが居なくなつたことに気付いた瑚太朗がダッシュで追いつく。

「あ、は、はい？」

「いいか、鳳：お前の田と心は濁り曇つていて見えないのかもしけないが」

「何だか偉い言われ様な気がしますけど……」

実際これはちはやは天然だから軽く流してるので、
ちはや以外に言つたら一発でアウトだと思つ。

「校門はあつちだ」

「はい、知つてます」

「じゃあお前は下校するんじゃないのか」「しますけど…」

「今日は自転車なんです」

「自転車通学です」

「なるほど…確かにそれならば校門に向かう必要がないのは頷ける」「ですよー。瑚太朗は早とちりで困りますね」「だが駐輪場は逆方向だ」

「朝自転車を止めに行つてゐるはずなのに

場所を間違えるとはさすが天然さんです」

「あ、今思いついたんですねがちはやのあだ名には天然さんとかどうでしょつか?」

「篠ちゃん……。ですがにそのあだ名は酷いと感づぬ

「そうですか……。いい案だと思つたのですが

「全く鳳さんは方向音痴で困つますねー」

「つう…」

「…そういう言い方するから、私はあなたが嫌いなんですか?」

「そりや、どーも。んじゃ今日はこれにて解散か

「ええ…」

「…冗談」

「…」

「ほら、むくれてないで行きましょ!よお嬢さん

「…はい」

「おつと、ちよつと設定を忘れかけていました。

今のは減点2ですね」

「審査員の篠さん、ちなみに今回ばかりはいつた部分が減点ポイントだったのでしょうか?」

小鳥もびっくり乗つてきてくれたみたいだ。

「今のはちやこ意地悪をしたからですね。好きな子に意地悪をして許されるのは小学生までです」「なるほど。参考になります」

「なるほど。ちょっと小洒落た良しシティサイクルだ」「じゃ、行きましょう」「待て、俺は?」「ダッシュでいいんじゃな?」「…案内って、どうちのままで?」「田園のままで行つてみたいですねえー」「あははー」「帰るわ」

「えええつ、い、いじまで来たんですからーー」「お前は俺に何キロ走らせる気だ」

「つ…」「仕方がない。いほひとつ…あんまり良くないが」「ひやつ」

瑚太朗が自転車の後ろに跨る。

「どうやら今日までのようですね」「え? どうして? 篠ちやんなり自転車へりい私と一緒にでも余裕で追えるよな?」

まあ小鳥と一緒に自転車を追いつける余裕なんだけど…

「やつですね。小鳥を抱えていけば追跡は可能です」「じゃあどうして?」

「小鳥。よく考えてください」

「今私たちは普通の人には見えない状態です」

「そうだね」

「その状態で自転車並みのスピードで道路を走つてたら
通行人や車などが危険です」

「あ！ 確かにそれは危ないね」

「分かってくれたようですね」

「という訳ですし、今日は一緒に帰りましょうか」

「ごめんね篠ちゃん。今日は瑚太朗君用にハーブを買いに行く予定
なんだ」

「あれ？ 瑚太朗用のハーブはこの前買いに行つてませんでしたか
？」

「そうなんだけど…。何か今日聞いた話だと
瑚太朗君心靈現象に悩まされてるみたいでね」

「ごめんなさい。犯人は私です。

「なるほど…。それで心靈現象に悩む瑚太朗の為に
何か良さそうなハーブがないか探しに行くわけですね」

「そういうこと」

「そんな訳なんで私は寄り道してくから先に帰つてくれる？」

「そういう理由なら仕方がないですね。では私は先に帰るとしまし
ょう」

「では小鳥。一旦さよならです」

「うん、また後でね～」

……さて、小鳥と一緒に帰宅計画も潰れてしまつたし、
一人寂しく帰りますか。

10月08日(金) 委員長は辛党?

「では小鳥、行きましょうつか」

今日も今日とて退屈しのぎに学校にやつて来た。
いつもと違うのは不可視状態じゃない点と、後は
小鳥と昼食を一緒に取る約束をしていた事くらいか。
なので今は小鳥と一緒に普通に廊下を歩いて学食を目指している。
ちなみになぜ不可視状態でないかといつと、注文しておいた
制服が届いたからだ。まあ制服さえ着ておけば不可視状態
じゃなくても大丈夫なはず…。

「小鳥。妙な視線などは感じませんか?」

「私は何も感じないけど?」

「そうですか。私も特に視線は感じませんし、制服さえ
着ておけば特に怪しまれる心配はなさそうですね」

「そうみたいだね」

「では、混雑に巻き込まれない為ににも早めに学食に向かうとします
か」

「らじやー」

少しは怪しまれたりするかな」と
思つていたけど特に何事もなく食堂に到着。

「天王寺瑚太朗おおおおおお…!」

列にちゃんと並べ。ズル込みは許さない、秩序は私が守る、制裁
する!」

食堂の中に入つたら、ちょうどドルチアが

瑚太朗に説教をしているところだつた。

それにしても割り込みくらいで鉄拳制裁なんて苦情は出ないんだろ
うか？

もしかしてこの学校の男子って全員M?

「おわー。委員長過激だねえ

「ですね。それよりまだ瑚太朗には遭遇したくありませんし、

「瑞太郎に見つからないよ」とを口にしてもいいですか？」

「い、いえいえ並びますよ、はいはいはいはい」

実際に床に転がっている生徒を確認したからか、瑚太朗は物凄い低姿勢でルチアに対応している。

「委員長は学食派なのか？」

気を乗せながら、たり、体調が悪い時に弁当を作らず、学食に頼ることもある。

「なるほどな。先日も続いてまた学食つて」とは、

お腹は冷やすなよ。ホウレン草がいいらしく、鉄分を欠かすなよ。

いそ。

「かづひやがんじて」

「んな、な、なななな… 何の話をしているんだああああああああ！」

!

瑚太朗が思いつきつぼほにされてる。

「瑚太朗君…………」

またしても小鳥の好感度が下がったようだ。

まああれだけ堂々とセクハラ行為をやってたらしじうがないか。

「それにしても瑚太朗はわざわざルチアを怒らせたりしますが、もしかしてルチアに殴られたいんでしょうか？」

「うーん…。幼馴染としてはさすがにそんな事ないと思いたいんだけどねえ…」

「ハイ、次の人～！ 注文は何！？」

「おつと、私たちの順番ですね。小鳥は何にしますか？」

「うーん。今日はカレーでも食べてみようかな」

「分かりました。すみませんカレーを一つお願ひします」

「あいよ！ あら？ 小鳥ちゃんが来るなんて珍しいね～。よし、ちょっとサービスで量を多くしておいたから、

いっぱい食べておくれよ」

「ありがとね、おばちゃん」

「何、いいってことさね。

ハイお待たせ、次の人～」

カレーをゲットしたので、どこかに空席はないかな～と思つて探してみると、二人組がちょうど食事を終えたようだ。

「ちょうど一人分席が空いたみたいですし、あつちに座りましょ～
「あ、本当だ。ちょうど席が空くなんて運がいいね～」

とこう訳で無事に席をゲット。

「あー、ズル込みだああああああ！」

「何い！ 誰だ、ズル込みをしたのは……！」

法を遵守できぬ者には正義の鉄槌で思い知らせてやる！」

席についてカレーを食べ始めよつと思つたら

瑚太朗の叫び声が聞こえてきた。

「何か瑚太朗君が叫んでるみたい、だけど割り込みなんてあつた？」

「いえ、別に割り込みは発生していませんよ」

確かにこの隙にルチアのカレーに細工でもするんだつたつけ？

「カレーを置いたまま、治安維持活動に向かうルチア……。

しかし、そのカレーに今まさに魔の手が迫ろうとしていた……」

「篝ちゃんは一体誰に喋りかけてるのさ……」

「まあまあ、今回はちょっとナレーション風に言ってみただけです。

それよりほら、瑚太朗の方を見て下さい」

「ん？ 瑚太朗君がどうかしたの？」

小鳥が瑚太朗の方を向いた時、ちょうど瑚太朗がルチアのカレーと自分のカレーとを交換していた。

「篝ちゃん、瑚太朗君は一体何をやつてるの？」

「ルチアの食べかけのカレーが欲しかったんじゃないですか？」

「冗談はいいから」

笑顔のはずなのに何か怖い……

「まあ今のは冗談ですが、今までの瑚太朗の行動を見ている限り、

「有り得ないと言つほどの考え方ではないと思いますが？」

「う…。確かにその可能性は否定できないね」

ついに小鳥も底い切れなくなつたみたいだ。

「それで話を戻すと、さつき瑚太朗は特製の激辛カレーを頼んでいたようですし、ルチアが激辛カレーに耐えられるかを試すつもりでしよう」

「なるほどね～。そういうえば委員長はかなりの辛党だつて噂を聞いたことがあるよ」

「そういうことです。あ、ルチアが席に戻つてきましたよ」

ルチアが席に戻りカレーを食べ始めるが、特に何事もなく淡々と食べているようだ。

「何か委員長普通に食べてるんだけど…。あれ本当に激辛カレーなの？」

「ええ、瑚太朗も受け取つた後に味見してたみたいですし、常人に耐えられる辛さではないはずです」

味覚があるなら普通に気づくだろうね。

「どうやら食べ終えたようですね」

「みたいだね」

ルチアが涼しげに完食してしまつたため、瑚太朗が何ともいえない表情で様子を見に行つた。

「よ、…よう、委員長。今食べ終わつたとこか？」

「……て、天王寺！？」

そうだが、……わ、悪いか？

私がカレーを食べると、…そんなにも可笑しいか…！？」

「まさか、また誰かのカレーと入れ替わった？」

そんなはずはない！ 味見もした。ずっと監視した！

誰かのと入れ替わったなら、その人間が憤死してるのは…！

間違いなく委員長は17辛を食つたはずなんだ！」

「な、…何だ。わ、私がカレーを食べるのが、

そ、そんなにおかしいか…！？」

「おかしい。舌か頭のどつちかおかしい」

「失礼だ、まつたくもつて失礼だ…！」

女の敵！ 天王寺瑚太朗おおおおお！」

ルチアの凄まじい威力のアッパーにより瑚太朗はダウンした。

「今回も瑚太朗の自業自得ですね」

「これは私もさすがに庇い切れないよ…」

ダウンした瑚太朗を尻目にカレーを食べる。

「学食は安い代わりに味が良くないと聞きましたが、
ここのかレーは中々おいしいですね」

「何でもうちの学食には色々な種類の店の料理人が
いるらしいからね。料理がおいしいのは当然かも
「なるほど、それならこの味も納得です」
「今後もたまには学食で昼食を取つてもいいかもしねませんね
「そだねー。たまには弁当以外もありかも」

そういう言つているうちに無事完食。

「さて、今日は制服での潜入兼昼食に来ただけですし、もう帰りま

す
ね

「うん、またね～」

では小鳥。一田さよならです」

「ふ、……不潔不潔不潔……。」

またしてもまたしても、私のお皿を私のお皿を

「まあ待て。この命懸けの実験で得られた科学的実験結果を聞け」

「…… そうか、命に未練はないのだな。

不潔不潔不潔、
変態変態変態！！！
馬鹿馬鹿死んじやえ、

.....何か後ろで瑚太朗がぼつこぼこにされてるけどまあ気にせず帰るとじよつ。

10月09日(土) ラスボスさんとの遭遇

……ついにこの日がやって来た！

今日は小鳥から、オカ研に誘われたといつ連絡があったので制服に着替えてオカ研部室にやって来た。

「どんな有望な情報を得られるか、お手並み拝見といつたところね」「む……ブログ……」

やって来たんだけど……

「……完璧じゃないか。……これだ」

そう言うと瑚太朗はブログをいじり始めた

「ただいまっ」

ようやく小鳥が帰ってきたようだ。

「遅いですよ小鳥」

「あ、篠ちゃんいらっしゃーい。思つたよりも遅かつたね」「ええ、ちょっと制服に着替えるのに手間取つてしまつて」「なるほどねえ。あ、そういえば瑚太朗君たちとの自己紹介はもう済んだ?」

「いえ、まだです。部室に入つてきてみたら小鳥はいませんし、二人はさつきからあの調子で全然私に気付きませんし……」「そつなんだ……」

本当、自己紹介のタイミングを見失つてしまつた。

「まあ自己紹介は一人が気づいたらすればいいとして、とりあえず私にもお茶を下さい」「りょーかい。はい、どうぞ。熱いから気を付けてね」「ありがとうございます」

小鳥に手渡されたお茶を飲む。

うん、中々おいしい。やっぱり朱音の財力のお蔭だろうか？

「ところで瑚太朗君は何してんの？」
「何かブログをいじってるみたいですよ」
「なるほどねえ。じゃあ邪魔しない方がいいのかな？」
「そうですね。区切りがついたら気づくでしょうし、しばらくは何か別の事でもしてたらどうですか？」

「ふうひ、これで大体大枠はできたな」

お、思つたより早く瑚太朗の作業が終わつたみたいだ。

「あれ？ 小鳥いつの間に帰つてきてたん？」
「うん？ 今さつきだけど？」
「集中してたからか全然気づかなかつたわ」
「本当、瑚太朗は無駄に集中力が高いですね」

瑚太朗が全然気づかないので、こちらから話しかけてみた。

「えーと、どちら様？？」

「どうやら記憶が戻る気配もないようだし、

瑚太朗とは直接会つても大丈夫のようだ。

「そういえば私たちは初対面でしたね。私は篠。小鳥の親友です。ちなみにあなたのこととは小鳥によく聞いています」

「あ、これはどうも」丁寧に。

「つてそれはいいとしていつの間にここに…？」

「普通にドアから入つてきたんですけどね。一人とも集中していたみたいですし、気づかなかつたんでしょう」

「天王寺、煩いわよ」

瑚太朗が大声で騒ぎすぎたので朱音も集中が切れたようだ。

「……何か増えてるわね」

「あ、どうも初めまして。小鳥の親友の篠です」

「…千里朱音よ」

「…天王寺、確かに好きにしろとは言つたけど…」

「え、違います違います。確かに小鳥は俺が連れてきましたが、この子は今さつき勝手にやつてきたんです」

「そうなの？」

瑚太朗が弁解すると朱音が私に問い合わせてきた。

「ええ、小鳥から部活を始めたという報告を受けたのでどんな所かな？」

「と思って来てみました。後は何か面白そうな気配がしていたので」

「面白そうな気配つて一体どんな気配よ…」

「まあまあ、そう深く考えずに。それより小鳥が入部するなら私も活動に参加してみたいんですが…」

「ちゃんと天王寺が責任を取るならかまわないわよ」

「では決定ですね」

朱音とがしつと握手をする。

責任を瑚太朗に押し付けることで何とか交渉が成立したようだ。

「なあ小鳥…」

「どうしたの瑚太朗君？」

「何か俺の意見を全く聞かずに話が進んでるんだけど…」

「気にしない気にしない。それに、私としても篳ちゃんが一緒に方が楽しいし、できればお手伝いを認めてあげて欲しいんだけど…」

「そつか。まあ小鳥がそこまで言つなら…」

どうやら瑚太朗の方は小鳥が説得してくれたようだ。

「ナイスです小鳥。これで私も晴れてオ力研の一員ですね」

小鳥とハイタッチを交わす。

「さて、では自己紹介も終わりましたし、部活動を続けましょか。確か今はブログを作成してるんでしたね」

「ああ、とりあえず大枠は出来たんだが…」

「こんな感じで問題ないかな？」

「では私たちが批評してあげましょう」

「そだね。どれどれ見せてみ瑚太朗君」

小鳥と一緒に画面を覗いて見ると、おどろおどろしい雰囲気のサイトが表示されていた。まあ「デザインはいいんだけどねえ。

「へー、雰囲気出てるだね」

「ええ、雰囲気は出でますね」

初心者にしてはよく出来ているとおもつ。

瑚太朗はこういつセンスはあるようだ。

「大枠はこんな感じかなつて思うんだけど、どうだ?」「うーん、ちょっとぴり読みにくいかも。

黒バックに赤字だからかな」

「そうですね。ホラーッぽい雰囲気が欲しいのは分かりますが、目が疲れやすい、読みにくいではせつからく訪問した読者も逃げてしましますよ」

「…でもオカ研なんだし、ホラーッぽい感じは外せないと思つんだが…」

「じゃ文章を少なくするか、文字サイズを大きくしたら?」「ブログで文章減らすのはちょっと…。

でも文字サイズは大きめにした方がいいのかな」

「あと全体的にゴチャつとしてる。もちーと見やすくした方がいいかも」

「え、具体的には?」

「だからね、こことか…」

「ここも少しひじつた方がいいんじゃないですか?」

わいのわいの。

30分もやつてると、なかなか見栄えが整ってきた。

「…形は整つたんじゃない?」

「うん、立派なブログだ。どこにやつても恥ずかしくないブログだ」

「それは少し言い過ぎだと思いますが、素人が作ったにしては中々見栄えが

するものが出来ましたね。これで後は瑚太朗の文章力次第で、駄

目ブログ

「」も良ブログにもなりえますね

「おお、篠ちゃんからもいい評価を貰えたよー。
じゃ、アップロードしちゃいなよ」

「いや、記事がまだだ」

パソコンの画面を見てみると、文字が全て、おむつ、で埋まつていた。

これをアップしたらある意味では話題になるかもしれないけど……
というか何でおむつ何だろ？

瑚太朗はおむつに思い入れでもあるのだろうか？
でも何か聞くのも怖いしここはスルーしておこう。

「どんな内容にするのかは決まってないの？」

「まずは挨拶と…ネタ募集。このふたつだな」

「ブログなんだし気楽に書いたら？」

「やつですよ。とつあえず書いてくれれば私たちも意見を出せます
し」

「でも」

何か瑚太朗がもじもじしだした。
男がやると少しイラつとくるね。

「どしたの？」

「…照れくさい」

「男は度胸。とりあえず書こちゃえばいいわ」

「心の準備が

さうこもじもじしだした。

イラつ

「それじゃいつまでも経つてもブログ始まらないと思つ。細かく更新しないといけないし、最初からためらつてけやいけないよ」「でも、だつて。人に見られたら恥ずかしいし。それに下手なことを書いてブログ炎上しちゃつたら困るしさ……ははっ。だから記事アップは来週……いや来用くらいを田途に検討に検討を重ねて……」

小鳥が満面の笑みを浮かべた。

昨日の食堂でも浮かべていた怖い笑みだつた。

「おセーヨタ」「ひーっ」「ひじひじしない、もじもじしない。ひじもじしないっ」「うっ……」「お書きー。」「お書きくますっ」「お書きくますっ」

早っ！

もひつ書きを終わつちやつたよ。

「書き終わりましたっ」「お上げ！」「お上げますっ」

あーあ。推敲もせずにアップロードしちやつたよ。
うん、この後の展開は知つてゐるけどあえて何も言ひまへ。

「どわーっ、何も考えずに勢いだけで書いてアップしちまつた！」「それでいいんだよブログなんだから」「どれ、読んでみようっと」「私も読ませて下さー」

瑚太朗が席を空けたので、小鳥と一緒にアップされたばかりのブログに目をやつた。

はじめまつぴー、オカ研特命隊長の天王寺です
このたび、我がオカルト研究会（通称OKA-KEN）は
活動を再開することになりましたーっ

わーどんどんどんぱふぱふぱふつ！

めでてー！マジめでてー！マジと書いて本気と読む！

心身気鋭のブービーたちを中心として再結成されたOKA-KEN！
風祭市にある様々な都市伝説を海綿…解明じゃボケエ！アホがあ！
こなん頼りない特命隊長から、読者諸君にひとつお願ひだ
身近で見聞きした様々な疑問や事件を俺たちに教えて欲しい！
これはというネタは、オカ研の精鋭調査団がきつちつ調査する！
気合いの入ったネタを期待するでおじやる！
以下の投稿フォームから、すぐにアクセスするオカよ！

…………
ないわー。

「ど、どうかな？俺、どんな文章書いたつけ？勢いに任せ
すぎてちょっと細かく記憶してはいらないんだよ、例によつて
「瑚太朗君、このブログ…。これはちょっと…なんてつたらいいの
か…」

「うん？」

「すつっつっじく楽しいねつ

「まじで？やつた！勝てそう？」

「勝てる勝てる。もうこの時点で勝ち終わってるよつたものだよ」

「おこおこ、勝利終了済とはほめすぎだぜ。皿身つきあわせやうだ
るー。

登らせるなよ、誰の心にもそびえるピノキオ天狗山脈を「

「自信を持つのはいいことだ」

「まいっただ…勢いに乗れたとは思つたけど、そんな会心の出来だつたとは」

「隠れた才能が噴火しちまつたのかな」

「瑚太朗君の文才に小鳥さんびつくりだよ。あまり家に帰つてこない瑚太朗君の」両親も会社でエクセレントつて叫んでゴーゴー踊つてるよ」

「しゃーねーなーもー！」

メモ帳にペンを走らせる。

サインのつもりだらうか？

「サインの練習しないと…」

「氣い早すぎつ」

「おおつとお！ セリヤセリヤだあああつ」

「……」

「… そんなに凄いテキだといつの？ そこまでの文才があのアホに

…」

ズベツ

朱音は突つ伏した。

「おや千里さん、どうなさいましたかな？」

「吐き気がしてね…」

「私は頭痛がします…」

「そりやいかん。私の作成したウェブサイトでも見て、心を慰める
と良いですぞ」

「死者も甦るといつ会心のオモシロサイトと評判でね」

「確かにサイトの内容に突つ込みたくて死者も甦る可能性はありま

すね

「…数年後に読み返して、恥ずかしさのあまり自殺したくなればい
い」

あまりにも酷い出来について皮肉を言つてしまつたが、
どうやら気付いていないようだ。

「どうやら今この場でまともな感性を持つてゐるのは私たちだけの
ようね…」

「ええ、そうみたいですね。瑚太朗は

ともかく小鳥まで感性が残念だつたとは…」

「で、物凄いはしゃいでいるみたいだけどこの一人どうしようかし
ら?」

「まあそのまま取まるでしようが、とりあえず放置でいいと思いま
すよ」

「それもそうね」

一緒にサイトを酷評していたら、朱音との間に妙な連帯感が生まれ
た。

「さつて、サイトも作つたといふで資料整理の続きでもするか

「あたしもやる」

「長い道のりだ。のんびり怠け」

「うん、ゆっくり焦るの」

「では一人とも頑張つて下さいね」

「あれ? 篠ちゃんは手伝つてくれないの?」

「私は旧オ力研の資料には興味ありませんので」

「そつかあ。それじゃあ仕方ないね。

「一人で頑張ろつか瑚太朗君」

「そうだな」

「だるうう…これが気疲れつてやつか
「さすがにちょっと疲れたねえ。お茶いる?」

お、小鳥たちが休憩に入るみたいだ。暇つぶしに部室の本を
読んでいたら、いつの間にかけつこうな時間が経っていたようだ。
それにしてもいつの間にか小鳥がお茶くみ係りになつてる気がする。
まあ自分で入れるのは面倒だから助かるけど。

「くれ
「私にもお願ひします
「会長さんは?」
「私はいいわ
「はい瑚太朗君、篠ちゃん
「サンキュー」
「ありがとうござります小鳥
「ちょうど六時ね。六時半には帰宅しないと
いけないのよ。貧乏人は六時半帰宅よ
「金持つてたらルール破つてもいいみたいな言い方しないでください
「金持つたやつがルールを作るのよ
「さて、ブログ誰か見てくれたかな?」

「どうやら今の発言は聞かなかつたことにしたよつだ。

「更新された部だけが自動的に一覧されるスレッド形式になつてゐるから、何人かは見たかもね
「ちょっとどきどきするね
「私は違う意味でどきどきしています」

炎上のなぞを感だね。

「よし、投稿があつたかどうかチェックだ」

瑚太朗がノートパソコンを起動し、サイトを確認しているようだ。

「おおおつ！」
「どうした！」
「もう投稿が来てる。一通」
「おー。ファンが！ ついに！」
「…いや、ファンじゃないだろ、ハハハ。
ま、ファンだとしても余眞番号は第四号だな」
「あたしと篠ちやんと会長わんが トップスリーだもんね」
「お待ち…」
「ああつ！」
「どうした」
「サインの練習しつかんきやだよー。」
「つてオイ！」
「しもうたー、ボケてもつたーつ。ファン効果悔りがたしだよ」
「ひじつめつ」
「ややーつ」
「ひつややつふふ。

「…バカッフル…猿のつがいが…」
「…」のテンションはちよつときつこですね…」

さすがにこのテンションに割り込むのはもつれつだし、
「」は朱音と一緒に静観しておこう。

「読んでみよ」^リゼー・」

「「ヒー・」

何これ、占い部？（笑）まじうけんだけど（笑）じゃ試験で必勝のおまじないを教える！（笑）けど勉強はしたくねえ！（笑）勉強なしで俺を学年トップに押し上げてみろや腐れオカ研ども！（笑）

「…超許せねえ」

「からだに勉強させてやるうかい」

小鳥も満面の笑みを浮かべて、怒りをあらわにしていた。

「潰しだなこ」^リいつ…」

「でも瑚太朗君、暴力はダメだよ」

「そうだな。俺も電撃退学はしたくない」

「言葉の暴力ならいいだろ」

「それなら平和だね」

「…………部室のトラブル8000円…」

朱音は来るべき面倒」と想像して先に釘を刺してきたようだ。

「会長、お願いがあるんですけど」

「…内容は予想できるけど、何？」

「「」^リいつ倒したい」

そつ言つて掲示板で投稿してきた例の一年生を示す瑚太朗。どうやら釘を刺した意味はなかったようだ。

「…だらうと思つたわ。確かに問題ある書き込みのよつだけビ、問題にする

には少々パンチ不足ね。明確な誹謗中傷をしたとかなら、正式な

手順で

厳重注意に持つて行きやすい。けれどこれでは

まあこのへりへい掲示板とかではよくあることだしね。

「でも絶対なめますよ」

「お前たちはまだなめられて当然の時期よ」

「いちいち過剰な反応をせず、まずは受け入れなさい

「えー、泣き寝入りですか？」

「掲示板なのだから、返信をすればよろしい。」こうこつた

愉快犯的な書き込みをうまく捌いてこそ、ネット上級者といつもの

「ネットに上級も下級もねえでしょ……返信ねえ」

「瑚太朗君、文才あるからいけるかも」

「そーかあ？ 僕いけるかなあ？」

「いけるいける。よつ、ブレジデント！」

「今日もニクイ大統領風、吹かしてやがるねえ」

「ショーガネーなーもー！ じゃこはひとつ、軽く流しとくかな

「軽くね。大人の対応で」

「わかつてゐ、DS大人の対応つて感じで行く。勝利の祝いには、純正タッチペン用意してくれよな、小鳥」

「うん、お任せだよ

「よし、返信だ」

「それにしてもこのテンションはちょっと付いていけそうにあり

ませんね」

「さうね。早く普通の状態に戻つてくれると良いのだけれど……」

小鳥たちは今ちょっと絡みにくいので、朱音と話でもしながらテンションが下がるのを待つとしよう。

「大人だねえ。惚れ惚れすらりあ
「いやさ、俺つて、大人びてるから
「よくそこまで正反対の自己評価を…
「さ、今日は上がるか
「あ、またすぐカキコされた！」
「え？ 誰？」
「同じ人みたいよ？」
「すげー早いな。張りついてんのかこいつ？」
靈が強襲つて（笑）バツカじやねえの？（笑）
俺はテストで点取れるおまじない教えろつつたんだよ
「だめ瑚太朗君、自分に負けちゃだめだよつ
「グ…グオ…」
「あかん」
「えいっ！」
「…グウウウ！」
「あまりきかない。だめかも…。こうなつたら…篠ちゃん助けて…」
「任せなさい。この一年生は少し調子に乗りすぎ
ですし、私が社会的に抹殺しておきましょつ
「ダメ、シャカライテキニマツサツ、ヨクナイ…」
「あれ？ 思つていたよりも冷静…」
「イマノオレ、トメル二ハ、コイツノチ、ヒツヨウ」
「ではありませんでしたね…」
「しようがないですね。このままでは危険そうですし、
私が物理的に黙らせてあげましょう
「物理攻撃は止めてあげようよ篠ちゃん…」

「そうですか、残念です。ではどうやって瑚太朗の暴走を抑えますか？」

「いりするんだよ……。瑚太朗君、はい電話帳。怒りはいにぶつけちやえ」

「ガルルル……。ムームガムグオアアアアツ！」

電話帳引き裂いちゃつたけど、これ怪力という話で済むのかな？
瑚太朗はもうちょっと気をつけないと能力の事一般人にばれちゃうんじや……

「ソシテチョット……ツカレタ……」

「落ち着いた？」

「……うん……少し。頭がぼんやりするな」

「……驚きものの怪力ね」

引き裂かれた電話帳を見て、朱音は引き気味のようだ。

「さて、瑚太朗も落ち着いたようですし、私はそろそろ帰りますね

「あれ？ 篠ちゃん今日は一緒に帰らないの？」

「ええ。小鳥もたまには瑚太朗と帰つたらどうですか？」「そうだねえ。まだちょっと暴走が心配だしそうするね」では皆さんお疲れ様でした。

「また週明けに会いましょう

「おつかれさま篠ちゃん」

「おー、おつかれー。じゃあまたなー」

「ええ……ご苦労様」

…さて、ようやくオカ研に入部したけど明日から休日か…
明日明後日は何して過ごそうかな〜

10月09日(土) ラスボスさんとの遭遇（後書き）

田付で分かると思いますが、ラスボスさんの正体は朱音さんでした。色々な原因があるとはいえ、ちょくちょく世界を滅ぼそうとしていますし、世界を滅ぼすといったらやつぱりラスボスでしょう。ちなみに今回ラスボスねたを何か入れる予定でしたが、思っていたよりも話が長くなつたので断念しました。ラスボスねたに関しては機会があれば入れてみます。

10月10日(日) 見えたか? 気づいたか? 私が悪靈だ(前書き)

セリフの前に人物名があると見にくい、という意見が
ちょくちょく出ていましたので、

今後も前回までのよう形で書こうと思います。
人物名があつた方が分かりやすいという方は、
ブログの方は人物名ありにしていますので、
そちらでご覧になると見やすいと思います。

10月10日(日) 見えたか? 気づいたか? 私が悪靈だ

「あれ? 小鳥、今日はお出かけですか?」

いつもより遅めの朝ごはんを食べていたら、

小鳥が余所行きの服でリビングに入ってきた。

「うん。瑚太朗君の家にこの前注文したハーブが届いてるみたいだから、

ちょっと瑚太朗君家のブランダをガーデニングしてくるよー。」

小鳥が満面の笑みで答えてくる。

でも明後日からテストなのにその余裕はいかがなものだらうか。よし、こには少し釘を刺しておくかな。

「確か明後日からはテストだと聞いた気がしたのですが……」

テストの話題が出た瞬間、小鳥の笑顔が凍りついた。

「そうだつたよー。」

「本氣で忘れてたんですか……」

「どうしよう。どうしよう」

「まあ学校のテストなんて一夜漬けで大丈夫でしょう。それに赤点さえ取らなければどうとでもなると思いますし」

「そうだよね」

再び満面の笑みで答える小鳥。

でも普段勉強しない人は何だからで一夜漬けも失敗する気が…

小鳥の事とはいえ所詮テストだししゃくまで『仮』ことめなぐてもいいかな。

さすがに留年するほど成績が危ない、ところが「とはなこと思ひ」。

「じゃあ氣を取り直して瑚太朗君家にしあつぱへつ」

「ふむ、瑚太朗の家ですか……」

「どうしたの篠ちゃん?」

「小鳥、今日は特にやることもありませんし、私も付いていっていいですか?」

このまま家に居ても暇なので、駄目もとで頼んでみる。

「うん? 篠ちゃんが瑚太朗君家に?」

「はい」

「う~ん」

小鳥が唸りだした。ちょっと悩んでるようだ。

「もうだね。テストが終わるまではあんまり相手できなやうだし、一緒に行こつか」

「ありがとうございます小鳥。
では改めて出発しましょ~」

「そだね」

そんなやり取りをした後、すぐに家を出てあつという間に、とはいかないけど、数分くらいで天王寺家の玄関にたどり着いた。

「さて、どうやら鍵がかかっているようだし、瑚太朗君を呼び出さないとね」

小鳥はいつも言つと玄関のチャイムを鳴らした。

それから少し待つていると、鍵が開く音がしてドアが開いた。

「おじや まします」

「うん、あがつて」

小鳥は何度も来ているからか、慣れた動作で家に入つていった。よし、私も小鳥を見習つて自然な動作で家に侵入しよう。

「ではお邪魔しますね」

「……」

「どしたの瑚太朗君？ 急に黙りこんじやつて」

「さあ？ 何か悪い物でも食べたんじやないですか？」

「なあ小鳥。俺は今幻覚を見ているのかな？」

「ここに居るはずのない人物が見えるんだが」

「え？ もしかしてついに昼間から幽霊が現れちゃつたの…？」

「そういえば最近幽霊に襲われているんでしたね。

で、幽霊はどの辺に見えますか？」

「お前だよーー！」

瑚太朗はそう言つて私を指差してきた。

「え？ 私が幽霊？ 「冗談は顔だけにしておいて下さい」

まあそういう意味ではないだらうけど、一応否定しておぐ。本当はそれが正解も正解。大正解なんだけどね。

「違つつて。何で簾がここに居るのかつてことを問題にしてるんだよーー！」

「後半の台詞には突つ込まないんだね…」

瑚太朗はスルーしたけど、小鳥が呆れ顔で突つ込んできた。

「何故かと聞かれたなら……まあ暇だからです。

そんな時に小鳥が瑚太朗の家に出かけようとしていたので、おまけで付いてきました」

「おまけって…」

「まあまあ瑚太朗君、篝ちゃんもオカ研を手伝うことになつたんだし、

親睦を深めるためにも一緒に遊ぶというのはいいと思つよ

「それはそなんだけど…」

瑚太朗め…中々渋つてゐるな。

まあ今の時点では恐らく小鳥に惚れているんだろうし、この反応は当然かな。

……しようがない。こういう時のための切り札を使うか。まずは会話を誘導つと。

「ところで」両親の姿が見えないようですが…」

「え？ ああ、うちの両親は今出張中だから、疑似一人暮らし状態だな」

「両親のいない家に女の子を連れ込むつと…」

自作の瑚太朗観察ノートに罪状を書き記す。

「あのー篝さん」

「何ですか？」

「それは一体何を書かれているのでしょうか？」

「ああ、これですか。これは瑚太朗観察ノートです。」

「このノートには瑚太朗のふしだらな行動を記録しています
「ふつ、俺はふしだらな行動なんて…」

瑚太朗は余裕の表情をしているけど、
残念な事にネタはかなりあるんだよね。

「10月6日、静流に体重、スリーサイズを問いただす
「10月7日、ルチアの食べかけのパフェを舐める」
「10月8日、ルチアが返却したカレーのルーを舐める」
「10月9日、ルチアの弁当の匂いを嗅ぐうとする」
「同日、朱音に胸をさわらせてくれるよう頼み込む」

今までの瑚太朗観察と小鳥からの聞き込みで得た情報のうち、
言い逃れが出来そうにないものを選んで列挙する。

「で、何か言いましたか？」
「生まれてきてごめんなさい…」

今までのセクハラ的行動を並べ立てられた結果、瑚太朗の
テンションは最低まで下がってしまったようだ。
よし、計画通り。後はこのまま押し切ろう。

「それで、私がここに居ることに何か問題がありますか？」
「すみません俺が悪かったです。どうぞお上がりください篠様」
「そうね。最初からそいつやって素直に上げておけばいいのです」
ようやく家に上がる許可が出たようだ。

「まあ篠が家に遊びに来ることなんて、
奴の来襲に比べたら全然問題ないよな…」

瑚太朗が暗い顔で何かぶつぶつ言つてる。

「どうしたの、暗い顔して」
「…今朝方、けいたるうつが逝去した」
「誰？」
「気の良い武神さ…」
「？ もしかして、疲れてる？」
「瑚太朗。あなた疲れてるのよ…」

某有名海外ドラマの台詞をぱくつてみる。

「夜が恐い…」
「どうしたもんやら」
「せつかく瑚太朗が好きそうなネタを振つたのにスルーされてしましました」

ちょっとヒシコック。

「ああ、すまん篝。でもこの幽靈騒動はマジで洒落にならんのよ」
「そういう事なら仕方ないですな」
「まあ昼間はいいんだ。おてんと様は素晴らしい。」
「昼間にはなんかこう、闇を退ける良き力があるように思えるよ」
「だから昼なんだよ」
「まあ小鳥たちは気にしないでいい。ひとまず「ヒーヒーでもしづ」
「うぜ」
「あ、先にこいつち、やつちやいたい」

小鳥は玄関に置いたままになつてゐる大量の荷物を揃さした。

「今週の緑化グッズだな。
じゃ一階に運ぶわ」

「お願いする」

瑚太朗が荷物の一部を部屋まで運んだ。

「私も手伝いましょうか?」

何もしないといつのも悪い気がしたので、瑚太朗にそう提案してみる。

「いいついといつ。 ひつ力仕事は男に任せとけ」

でもやつぱり瑚太朗は女子に重い物を持たせたくはないようだ。

「まあそつこう事なら仕方ないです。 では荷物運び頑張って下さ
い」

「おう。 ちやつちやと運ぶぜ。」

それにしてもまた今日もどつたりだな

「またたくさん買つちまたよ」

「いいつて。 どうせ俺の元には落ちてこない金なんだし。
それじゃ残りも持つてくれる。 一階で待つてくれ」

「体育座りで待つてる」

「私は工口本でも探しながら待つてますね」

まあ実際に探すつもりはないけど。

「ちよつと、 篠さん?」

「あなたは一体何を仰つてるのでしょうか?」

「ふむ、 冗談で言つただけですが、 その態度からすると

家のどこかにはエロ本が隠されているようですね。
まあ私も鬼ではありませんし、実際に探すのは止めてあげましょう

う

「やっぱり瑚太朗君も男の子なんだね…」

小鳥が遠い目をしている。

さすがに瑚太朗の好感度を下げ過ぎたかな?
ちょっとフォローを入れておこう。

「小鳥。男子高校生にもなると逆にエロ本
などに興味が無い方が少数派だと思いますよ」

とりあえず一般論を述べてみる。

「そうなんだ…」

「そういう訳なので瑚太朗をあまり変な目で見ないであげてください
いね」「
「篝…」

瑚太朗が私を救世主でも見るような目で見つめている。

まさか私が瑚太朗の肩を持つとは思っていなかつたのだろう。

「つてちょっと感謝しかけたけど、よく考えたらお前が元凶だら…」
ばれたか。

「まあまあ。元々の原因は瑚太朗がエロ本を持つていた
ということになるんですけど、この話はこの辺で打ち切った
方が瑚太朗のためにはいいと思いますが?」
「確かにそれもそうだな…」

「はいはい、じゃあこの話は終わりという
ことでちやつちやと荷物を運んで下さい」

キリキリ運んできた。
やはり力はけつこう強いみたいだ。

「…そこのぼつちやり系の人？」

小鳥が廊下から室内を観察しているのを不審に
思つたのか、瑚太朗が軽い感じで声をかけてきた。

「小鳥、呼ばれますよ？」

この場には一応二人いるけど、ぼつちやり系の称号は
欲しくないし、即座に小鳥に称号を譲渡した。

「言つたのは俺だけ、何気に籌もひどいな…」
「ぼぼぼちやり系ちやうわつ。あと三年くらい
かけてスーパー モデル並みにスリムになるし
「有酸素運動3000時間くらいしないとな」
「芸能界デビューするよ」
「芸名は」
「骨川スリム」
「…色モノアイドルみた이다。
で、俺の部屋がどうしたつて？
また男臭いとか騒ぎながら窓全開で換気しようつゝつもり
なら、俺はいつでも傷つく準備はできるからな
「よし小鳥、早速換気を始めましょう」

瑚太朗を落ち込ませてみたいので、小鳥にそう提案した。

「ちがう。なんかね……」

小鳥はこちらをちらちら見ながら何か悩んでいた。

「…波動を、感じた」

奇妙な手振りとともにそう言つて

「波動」というとアレか。ウエーブ的な何かか」

「皮でアリ、振動でもあるのか」

両方の性質を持つているがモード

妙な流れになつてていたので、とりあえず突っ込んでみた。

「おとし」とて詰つて、妙な気配がしたなーってことだ」

「これがそつだと申すか…」

備の部屋は今最高にヤハしんだ

「部屋入るうとして、びくつとしてしまったよ。」

「余張子が何をやる」

でも朝からメールしてんだけビレス来ないんだよな。

「効果あつたんだ、会長のマジカル」「あつたあつた、すげーと思いました。

でも、いろんな偶然の結果に過ぎなかつたんだ、それ」

「次の対策をおねだりしなきゃ…今日中」「その必要はありません。

謎は全て解けました」

「…む、ガーデニングやろううぜ」

「ちょっと、無視しないで下さい」

「だつてなあ…」

「ちなみに聞いておくと、原因は分かったのか?」

「いいえ、さっぱりです」

「やっぱ無視して正解じゃないか…」

「まあその話はもういいとしてガーデニングを始めましょうか」

瑚太朗が自分から言つてきたくせに、と

言いたげな表情をしているがそこはスルー。

「そうだな。楽しい気分で満ち満ちていれば、靈も逃げるかもしけんし」

「うん、おつけー。

それにもしても瑚太朗君ちのベランダ久しぶり

「三週間ぶりくらいだな」

「お代金もらつてるから頑張らないと。

この三週間、あたしが言つた通りに世話していってくれた?」

「ああ、もちろんだ。

たつぶり世話しどいたぜ」

「そ、よかつた。じゃ今日は楽そうだね」

私たちがベランダに躍り出ると、
何とそこには荒れ果てた小鳥のガーデンが!

「枯れてるーーーっ!? あたくし様
のささやかな緑化運動が! 茶っこい!」

「小鳥さんを」こんなに動搖させるだなんて
井せみえみ。四三す。シガ・ロラア

許せねえな……相手すんぞ——テア！ 出で——しゃあ！」

「あんた（あなた）です」

思わず小鳥と一緒に突っ込んでしまった。

「…」じめんなさい

全滅せんけ

四庫全書

卷之三

せつかくおまえがクリエイトして、

「限界が ここにいる。」

暴君か独裁者ばかりの手際で、完璧に

「さすがは瑚太朗です」

パソコンとネット環境はあるんだし、ハーブの育て方くらい調べよ

「愛情たつふり水たつふり栄養剤たつふり…」

「…そちは今、栄養剤と申したか？」

そういうのは難しいから、置いていいかながつたんだけど？」

大量購入して、栄養祭り

卷之五

栄養の与えすぎが原因です。

お思ひも一轍なかつた

栄養も愛情も、
えすきはため」

「愛情も？」

「そ

「愛情はいいと思うんだけどな」

「今はドライでクールなのが流行りなの」

「…そんなもんかねえ」

そんなこんなで、ガーデンを総入れ替えすることになってしまった。

「悪い、すごい手間かけちゃつて」

「仕方ないよ。

「大量に買い込んで正解だつた」

「瑚太朗君は手伝わないでいいから、下向つてコーヒー淹れといて」

瑚太朗は早速戦力外通告されていた。

「うん。じゃ、めちゃ美味しいの淹れるわ」

「さて、大仕事だねこりや」

瑚太朗がコーヒーを淹れに下に降りたので、
小声で小鳥に話しかけた。

「さて、部屋に入る前に小鳥は気づいていたようですが…」

「うん」

「最近の幽霊騒動の犯人は私です」

「やっぱりそうなんだ」

「まあ理由についてはいつも通り、予知で見た未来に近づけるため
ですね」

「そつかあ。まあ詳しい理由は聞かないでおくよ」

「そうしてくれると助かります」

「おーい、コーヒー入つたけど？」

「 もう一つ」

「 どうやら瑚太朗が戻つてくるみたいですし、この話はここまでこ
しましよう」

「 そだね」

しばらくすると、お盆にコーヒーと
クッキーをのせた瑚太朗が部屋に入ってきた。

「 どんなもん?」

「 まだ序の口」

今はまだ枯れた植物の処理中だ。

「 土も取つ替えない」とアカンの。
土は自分でブレンンドしなきゃ」

「 本格的だな…」

さすが天王寺家のガーテナーであらせられた神戸さんや
「 ふへへえ」

瑚太朗に褒められて小鳥はにやにやしてこる。
どうやらまんざらでもないようだ。

「 休憩しよう」と

「 では私も」相伴に預かりましよう」

小鳥と一緒に室内に戻り、コーヒーに口をつけた。

「 しかし全滅してたとはな…気付かなかつた」

「 どうりでハーブ効果がないはずだ」

「 精神安定に効果あるんだつけ」

「うん、やう。

お脳によく効くチヨメチヨメ成分がね？」

「あんま詳しく聞かない方がいい気がするな、その話題…」

「このクッキー、おいしいねえ」

「近所のパン屋で売つてた。いつ1-5キロカロリーだつて」

「素敵だよ」

「薄味だから、ブルーベリージャムをつけて食べるといつまご」

「しあわせだよ」

「小鳥、そんなにジャムをつけたら太りますよ」

「……ところで気になつてたんだけど」

「じつやう都合の悪いこととは聞かなかつたことにしたようだ。

「うん？」

「この紙切れなに？」

小鳥は机に置きっぱなしになつていた、紙くず（式神）をつまみあげた。

「そいつ、けいたるう。

俺思いのいいやつだつた…ぐ。

いのちひとつで一夜ずつ、俺を守つてくれた…

「…なんだろう、全然わからない話になつてゐ…」

「小鳥、そつとしておいてあげましょう」

さすがに式神は喋れないと思うし、きっと夢でも見たんだろう。

「三晩の撃退でもう諦めてくれた」とを期待したいよ、靈にま

「そんな瑚太朗にこのでプレゼントのお知らせです」

もう襲撃しなくても問題ないだろうし、ここいらが潮時かな。
という訳で、バッグの中に入ってきた小鳥の
家のハーブを取り出して瑚太朗に手渡す。

「えーと、何これ？」

瑚太朗はこれが何なのか分からなによつた。
まあ普通のハーブだしね。

「聞いて驚きなさい…。何とそれは除霊ハーブです」
「な、何だつてーーー！」

驚いてる驚いてる。

「こ」の前街を散策中に偶然露店で見つけたので、確保してみました。
その式神とやらが役に立つたのなら、もしかするとそのハーブも
未知なる力を秘めているかもしませんよ」

「なるほど…確かに一理あるよ」

「まあ万が一程度の可能性だとは思いますけどね」

本当はただのハーブだから億に一つも可能性はないんだけどね。

「それでも助かるよ。ありがとう篭」

「…何か瑚太朗がえらく素直ですね」

「それだけ靈の襲撃に参つてることなんじやない？」

「まあ何はともあれ、喜んでもらえたなら良しとしましょう。」

では、プレゼントも渡しましたし、私はそろそろ帰りますね

「え、もう帰っちゃうの？」

「ええ、もうすぐテストですし。という訳で小鳥もあまり長居しな
いよう」

出かける前に釘を刺したから大丈夫
だとは思つけど、一応もつ一度言つておく。

「だ、大丈夫だよ」

目が泳いでいた。

しうがない、瑚太朗にも頼んでおくか。

「瑚太朗も小鳥があまりにも長居するようだつたら追い出して下さ
いね」

「任せとけ。俺のせいで小鳥が留年とかになつたら嫌だしな
」では一人ともさよならです。また学校で会いましょう

小鳥とは家で会つんだけど、同居してるのがばれると
色々と面倒な事になりそつだし、一応秘密にしている。

「うん、じゃあまたね」

「ああ、じゃあまた学校でな」

二人に見送られながら、瑚太朗宅を後にした。
さて、この後は何をして暇をつぶそうかな

……ちなみにこの日小鳥は夕方まで帰つてきませんでした。

10月11日（月） 天と吉野の神隠し（前書き）

今回は篝の単独行動での追跡のため、最初の方の小鳥とのやり取り以外はほとんど原作と同じです。後はオリジナル要素が少ないので、いつもに比べて短めです。

10月11日(月) 天と吉野の神隠し

「瑚太朗の靈圧が消えた……！？」

遅めの朝ごはんを小鳥と一緒に食べていた時、急に瑚太朗の位置情報が掴めなくなつた。

「どしたの急に？」

小鳥が呑氣に訪ねてきた。小鳥は某死神漫画を読んでいないのだろうか？

……まああれは週刊少年だし、読んでないのもしょうがないか。

「全く小鳥は呑氣ですね。瑚太朗の靈圧が消えたというのに」

「いや、いきなり靈圧とか言われても……」

「まあ簡潔に言うと、瑚太朗の体内にある私の一部を感知することでき

瑚太朗の大まかな位置情報などは常に把握しているのですが……」

前は出来なかつたけど、瑚太朗の観察とかをしていたら最近は何となく分かるようになつてきた。

「ですが？」

「その位置情報が分からなくなりました」

「それつて大変な事なの？」

「ええ。最後の位置情報は学校でしたし、多分ガイアの魔物が生息している空間に迷い込んでしまつたみたいですね」

「それは一大事だよ！？」

小鳥にもよつやく深刻さが伝わつたようだ。

深刻さが伝わってなかつたのは最初にネタ振りをしたせいかも知れないけど…

「ようやく事の重大性が分かりましたか。

そういう訳ですので、私は瑚太朗の所に行つてきます」

「うん、早く行つてあげて！」

小鳥の切羽詰まつた様子の言葉を背に、学校へと向かう。確か吉野と一緒に裏学校を探検してただけだったはずだし、大丈夫だとは思うけど、一応急いで行くとしよう。

「うお、悪いっ。

「考え」としてた。なんだ？ どんな恋の相談だ？

「恋の相談じゃねえよ…。

「ここはどこだ？」

という訳で無事学校に到着。見つかると面倒なので当然不可視状態です。

「学校だろ？」

「だから、学校のどこだ」

「どこつて…」

「迷つちまつたようだな」

「広いからな、ここ。」

適当に階段降りていけば、わかる場所に出るだろ

「さつきから探しちゃいるが、階段をとんと見ねえ。で、今さつきあんなものを見つけた」

吉野が廊下の行き当たりにある6階という表示を指す。

「オレたちはいつも四階から六階に移動したんだ?」

「話し込んでいる間に無意識に階段を昇った…つけ?」

「いや、記憶にやねえぞ。」

ちつ、こんがらがつてきやがつた。

天王寺、今度はそっちが先に行け。出口まではどんな

くだらねえ話にも付き合つてやるから、とつととオレを帰らせる

「おお、こんな時こそマッパーの出番だ!」

新宿駅だろうがウメチカだろうが…完全攻略してやんよ」

瑚太朗は例の地図ソフト、マッパーを起動しているようだ。

「あれ?」

「どうした」

「なんか携帯自体が受信できてねーな」

「…オレのもだ。」

校内で使えないなんて、はじめてだな」

「まあマッピーは、室内はマッピングしてくれるだけだから関係ね

一けど」

そつと瑚太朗は早足で廊下を進んでいった。

「おい…」

「ああ、どうした…」

「いつまで歩かせやがる…」

さすがに少し歩き疲れたのか、吉野が文句を言つている。

「もつちゅつとだバディ（相棒）」

「ノーバディだ」

「意味違うだろ」

「要是はテメも迷つてることだな？」

「こや、こべら歩いても田舎地につかないだけだ」

普通それを迷つてゐるところ。

「迷つてゐるじゃねえか」

「なんなんだよ、この校舎は？」

「知らねえ。こっちが訊きたいもんだ。

でかい建物だつてことはわかつちゃいたが、これほどだつたか？」

どう考へても明らかに異常だと思つ。

「汗ばむせいで歩かれてゐるな。

小鳥のやつだつたら、汗ばむわあ、つてネタ振りしてくるところだ

「そうこいつ」とを言ふやつな女芸人ならオレも知つてゐるがな…。

…そうか、あいつはそういうことを言つタイプか

「なんだよ」

「なんでもねえさ。

それより迷路だ。階段もないと来た。こつはおかしいだ

「延々と廊下が続いているよな…。

つうか、これつてあれか…」

そういえば瑚太朗は以前も圧縮空間に迷い込んでたね。

「マッピーも延々と一本道を出力してゐるな。

トンネルか渡り廊下でもなればこんな細長こマップにならんぞ。

明らかにおかしいわけだ

「教室に入つてみるか」
「そうだな……」

瑚太朗たちは教室に入つていつたけど、面倒だしここで待つてるとしよう。

これだけ近くにいれば何か起きても大丈夫だろつし。さて、暇つぶし用に持つてきた本でも読むかな。

（読書中

がらがらつ！

お、よみうやく教室から出てきたみたいだ。
どうやら今度は来た道を引き返すみたいだ。

無言で歩き続けること15分程。
ようやく瑚太朗が口を開いた。

「吉野、携帯の電話、見てみれ」
「こいつは……電波が途絶してるようだな」
「途絶してるのは俺たちの方かもな」
「どういう意味だ」
「よく言うだろ、神隠しつて。
ある日忽然と消えてしまつて、一度と戻らない……みたいな」
「ざけんな」
「だつたら良かつたんだけどな……」

また無言で歩き出したよ……
しうがない、ただ付いていくだけといつのも暇だし、
本でも読みながら付いていくかな。

「…おかしい」

「だな。来た以上に戻つてゐる」

瑚太朗は再びマッピーを起動したしたようだ。

「マジかよ！」

「どうこうことだ…」

「さつきから見てゐそいつは、いつたい何だ？」

「ああ、マッピーってウォーキングナビゲーションソフトだ。

歩いた場所を記録してくれる」

「ところがね、マッピー君はさつきまで歩いてきた地形が変わっちゃいましたってエラーを吐いてる。

現実の地形が瞬時かつ物理的に書き換わった、とでも言おうが

「…奇つ怪な話になつてきやがつたな」

「文明の利器も役立たずとはな」

「歩くしかねえか…」

「それが俺たちのマイウェイだな」

「…どつちかといやあスピリットアウェイだろつよ

「意味は」

「テメエで調べる」

「あれか」

再び歩き出した。

1～2時間くらいは経つただろうか？

別に疲れたりはしないけど、とにかく暇だ。

本を読みながら歩くのはやっぱり危なかつたし…

お、また立ち止まつたみたいだ。

さて、また歩き出す前にまた本でも読んでもよ。

（またまた読書中

「だらつ、がつ、げほつ」

「ふーつ、ふーつ、ふーつ」

お、これはそろそろオカ研の部室に突っ込むところかな？

「どつしゃああああつ」

「…ふつ…？」

朱音が机の上でアイスを食べてる。
いずれ話し合い（脅迫）に使えるかもしれないし、
持ってきてたデジカメで撮つておくかな。

【瑚太朗】

「あ？」

あまりにもおかしな光景に瑚太朗はフリーズしてしまつたみたいだ。

【瑚太朗】

「なんすかああああつ、あんたああああつ」

さて、無事に圧縮空間からは抜けれた
みたいだしもう帰つても大丈夫だろう。
後は家に帰つて小鳥に瑚太朗の無事を
報告すれば今日のミッションは終了だ。

……今日は何か精神的に疲れたし、報告が終わつたらすぐ寝ると
しよう。

10月11日(月) 天と虹野の神隠し(後書き)

次からはテストなのであまり書くこともありませんし、一気に数話更新するかもしません。

10月12日(火) カンニングは犯罪です(前書き)

今回はかなり短くなりました。

原作でもさつと通り過ぎてますし、
テスト中といつ事で絡めるキャラがあまりいないので…。

10月12日(火) カンニングは犯罪です

「おはよー」さこまつ小鳥
「おはよー、篠ちゃん……」

朝食後にワーリングでくつらいでいたら、
眼の下にくまを作った小鳥がやつてきた。

「随分と眠そうですね」
「うん……。昨日ちょっと遅くまでテスト勉強してたからね……」
「とりあえず顔でも洗つたらどうですか?」
「うん。やつするよ……」

今日はまた一段と小鳥のテンションが低いみたいだ。
いつもは寝起きでも割とテンションは高めなのに……。

「それで、朝」はんはどうしますか?」
「ちょっと食欲ないかも……」
「それは言つてもきちんと朝食を取つておかないと
テスト中に頭が働かないかもしませんし、
とりあえずこれでも食べておきなさい」

小鳥に向かつてカロリーメイト(チヨコ)を放り投げた。

「ありがと、篠ちゃん」

カロリーメイトが小鳥の口の中に消えていく。
まあ一箱食べたなら栄養的には多分問題ないだろ?」

「さて、では栄養の補充も終わつたようですし学校に行きますか」「あれ？ 今日はテストなのに篠ちやんも学校に行くの？」

「ええ。家に居ても暇ですからね」

「学校に来ても特にやることはないと思うんだけど…」

「そうですね。確かにテスト中は皆忙しい。これは事実です。ですが、朱音ならあるには…」

「あ～。確かに会長さんならテスト受けてないかもね」

「そういうことです。まあ学校までは大して時間もかかりませんし、部室に居なかつたらまた家まで帰ればいいだけですからね」

「ではそろそろ時間ですし、出発しましょうか」

「そだね」

家の鍵を閉め、学校への道を一人で歩く。

制服姿なので、普通に話しながら行けるからわりと気楽な感じだ。制服がくるまではわざわざ不可視状態にならないといけなかつたし…。

「そういういえば小鳥、テストの必勝法を思いついたのですが聞きたいですか？」

多分小鳥は採用しないと思うけど、昨日の夜ある方法を思いついたので、話を振つてみる。

「え！？ そんなのがあるの？」

「それは小鳥さんが今一番欲しい情報だよ…」

物凄い食いついてきましたね…。物凄い食いつきっぷりだ。

「物凄い食いついてきましたね…。物凄い食いつきっぷりだ。

まあいいでしょ、そこまで言つたら教えてあげましょ」

「ありがとう篠ちゃん！」

「テストの必勝法とは……」

「必勝法とは？」

「私が一緒に付いていて他の人の答案を観察し、それを小鳥に教えることです。これで満点は無理でもかなりの高得点が期待できます」

「これこそ、私と小鳥だからこそ使える究極のテクニック！」

「それは必勝法じゃなくてカンニングだよ……」

「大丈夫ですよ小鳥。絶対にばれませんから」「ばれるばれないの問題じやないの……」

「そうですか……いい手だと思ったのですが

「とにかくカンニングは駄目だから、

今言つた方法は絶対に使わないでよ……」

「それは使えと、う振り……」

「じゃないからね」

以前も同じネタをやつたからか、言つ前に潰されてしまった……。しかも満面の笑顔で……。

「中々突つ込みが鋭くなつてきましたね」

「そりや篠ちゃんがよくボケてくるからね」

「さて、もう少し話を続けていたいところですがもう校門も見えてきましたし、私はそろそろ部室の方に行きますね」

「いってら

「ええ、ではまた後で会いましょ」

「うん、またね」

校門で小鳥と別れ、5階にある部室へと行ってみたが、さすがに朱音はいなかつた。

……今日はもう帰るとしよう。

本当、遊ぶ相手もいないし早くテスト終わらないかな。

10月12日(火) カンニングは犯罪です(後書き)

次回も多分短くなると思います。

10月13日(水) ラスボスさんとの交渉(前書き)

今回は珍しく完全にオリジナルで構成されています。
後、最初は短くする予定だったのですが、朱音との
会話を書いているうちにいつの間にかかなりの長さに
…

「おはよー! やあこまつ小鳥」

「おはよー!。 篠ちゃん」

いつも通り朝食後にリビングでくつろいでいたらい、ゾンビのよつた足取りで小鳥がやって来た。

「今日もまた随分と眠ねうですね」

「うん。 今日は苦手な教科があるし、昨日よりかなり遅くまで勉強してたから...」

「とりあえず顔でも洗つてきなさい」

「うそ。 そうする...」

今日はせりに小鳥のテンションが低いみたいだ。さすがに一日続けて勉強漬けで気が滅入ってるのかな?

「それで、朝」はんはどりますか?」

「今日もちょっと食欲ないし、カロリーメイトでも頃戴」
「やつはと思つて既に用意しておきました」

小鳥に向かつてカロリーメイト(チーズ)を放り投げた。

「ありがと、 篠ちゃん」

これで一日連続で朝食はカロリーメイトか...まあ朝食だけだし、多分問題ないだろ?。

「さて、では今日も元気に学校へ行きますか」

「私はテストがあるからそんなに元気になれないよ……。

テストを受けなくていい篠ちゃんが羨ましい……」

「まあ学生の本分は勉強ですからね。」

それに今日はきついかもせんが、もつ森に行く必要
もありませんし、今後はそこまできつともないと思いますよ」

今後は学校を休まないで済むと思つし、

ここまで苦労するのは今回が最後だらう。

「それはそうなんだけど……」

小鳥は一応納得したようだけど、まだどこか不服そうだ。

「まあまあ、ここで嘆いていても何も始まりませんし、
とりあえず学校に行きましょ」

「そだね……」

小鳥もさすがにこれ以上愚痴を言つのは止めたようだ。

家の鍵を閉め、学校への道を一人で歩く。

小鳥は教科書を読みながら歩いているし、

今日は本当に危険な教科があるようだ。

「小鳥、前を見て歩かないと危ないですよ」

私が前を見ているから多分大丈夫だとは思つけど、

念の為に小鳥にも教科書を見ないで歩くよつ注意する。

「「めんね。今日はちょっと本気で危ないから、

前方確認は篠ちゃんにお願いするよ

「まあそういうことなら私は構いませんが…」

「ありがと、篠ちゃん」

小鳥はそう言つと再び教科書を読み始めた。小鳥は教科書を読むのに集中しているので、特に会話も無く学校への道を歩いていく。

しばらくすると校門が見えてきたので、小鳥に話しかけた。

「さて、もう校門も見えてきましたし、私はそろそろ部室の方に行きますので、小鳥も一旦教科書から目を離して下さい」

「え？ もう着いたの？ 集中してたから全然分からなかつたよ」

「着いたのに気付いてなかつたんですか…」

よっぽど集中してたみたいだ。

「では私は部室の方に行きますので。」

「うん、またね~」

「ええ、ではまた後で会いましょう」

今日も校門で小鳥と別れ、5階にある部室へと行ってみる。昨日も居なかつたみたいだし、今日も居ないかも知れないな。そう思いドアノブに手をかけてみると、普通にドアが開いた。どうやら鍵がかかつていなかつたようだ。

「よつこセジプシー。我が神秘の部屋に

真っ暗な部室の中には、

黒いロープを羽織つた朱音が、座つていた。

「朱音、それは魔女のコスプレか何かですか？」

それでも朱音がコスプレ好きだったとは意外ですね」

とりあえず先制攻撃を仕掛けた。

「コスプレじゃないわよ……。

これはキャラ作りの一環で……」

「そういうものをコスプレって言つと悪いつのですが……」

「……ぐぬうー！」

「はい、1ぐぬう頂きました~。

「それはまあいいとして……」

「逃げましたね」

「分が悪いと悟つたようだ。

「……それはまあいいとして、本題に入つても構わないかしら？」

「本題？なるほど、一人でコスプレをして楽しんでいた訳ではなく私を待つていたということですか。私が来るかどうかも分からぬのに何故そんな面倒な事をしたのかは知りませんが、何か話があるなら聞くのは構いませんよ。暇だったので部室に顔を出しただけですから」

まあ恐らく私の身元調査をしたもの、情報が全く手に入らなかつたから直接私に尋ねてみよつ、と言つたところだらう。

「やう？ それじゃ聞くけど、あなたは一体何者なの？」

やつぱりそうか。さて、ここは事前に小鳥と打ち合わせておいた通り答えるとするか。でもその前にとりあえず一回とぼけてみよう。

「何者、とはどういう意味ですか？」

「私が調べたところによると、篝という

人物はこの風祭市内に存在しないわ」

さすがにガイアのお膝元だし、その程度は楽に調べられるか…。

「さすがは聖女のしもべと言ったところですか」

「！？ その名を知っているという事は少なくとも一般人ではないよ」

「そうですね、まあ簡単に言つと私は野良の超人です

「野良の超人ですって！？」

まあこいつっておけば、ガーディアンとガイアは敵対関係だし、諜報能力は

ガーディアンの方が圧倒的に高いという話だったはずだから、私の身元調査

は断念せざるをえないだろう。

「ええ、つい最近まではガーディアンに所属していたんですが、厄介な任務を強制で任せられそうでしたので、ちょっと逃亡してきました」

「ちょっと逃亡って…

「そんなに軽く抜けるものなの？」

よし、話に食いついてきたようだ。

「いえ、最初の頃は追手も来っていましたよ？まあ最近は見かけませんけどね。多分諦めたんだと思います。私は基本的に自衛しかしてないですし、今の忙しい時期に、敵対行動を取つてこないものに人員を割く余裕もないのでしょうか？」

全部嘘だけだ。

「なるほど…。確かに今の話が本当なら、今の時期にわざわざ戦力を減らすような真似をガーディアンの連中がするとも思えないわね。…ちなみに逃げ出すきっかけになつた任務つてどんなものだつたの？」

「任務についての質問が来たか…。まあとりあえず達成が難しそうなやつを言つておけばいいだろ。」

「クリボイログ、キリマンジャロ、フォゴ、地竜の撃破ですね」

とりあえず覚えている中で強い魔物を言つてみた。

「それはまた無理難題を押し付けられたものね…」

「まあ前3体については特に問題は無いと思いますけど、地竜についてはちょっと実力も分かりませんし。」

「私は勝てる戦いしかしない主義ですし、何より死にたくはありませんからね」

「実際は地竜にも普通に勝てると思つたけどね。」

「これで私が何者か、という事に関する質問は終わりですか？」
「ええ、結構よ。本当かどうかの確認はできないけれど、少なくとも矛盾は見当たらなかつたわ」

「まあ本当のことですし。

それで、本題はこれで終了」ということでいいんですか？」

「これで終了だつたら楽なんだけど、さすがにそこまで甘くはないだろう。

「いえ、ちょっと待つて。後いくつか聞きたいことがあるわ」「ふう、しようがないですね。では手短にお願いします」

「分かつたわ。ではまず一つ目。あなたの目的は何?」

「目的ですか?」

「そうよ。あなたがガーディアンを抜けたというのなら、何故このオカルト研究会に入会したの?」

「それは朱音に最初会つた時言つたように、面白そつだつたからです。

幼い頃から訓練などで忙しかつたので、まともに学校には通つてないですし、せつかくガーディアンを抜けたなら青春を謳歌してみるのもいいかな」と思いまして

「なるほど…。では次は神戸小鳥との関係についてよ。

もしかしてあの子もガーディアンの関係者だつたりするの?」

「いえ、小鳥はガーディアンの関係者ではないですね。

あの子は以前森によく行つていたんですが、ちょうど私が

森を抜けていた時に魔物に襲われていてね。

さすがに放置するのは目覚めが悪いので、魔物を殺して助けたところ、えらく感謝されまして。それ以来寝床などを提供してくれている、まあ最初の紹介でも言つたように友達のような関係ですね

「ね

はあ、ねつ造設定を喋るのもいい加減疲れてきた。
そろそろ終わつてくれないかな。

「つまり神戸小鳥はガーディアンの関係者ではないけど、ある程度は裏の事情を知っているということね？」

「ええ、そういう事になりますね。ガーディアンとガイア、両組織の理念などは簡単に説明しましたので」

一応この辺りのことも小鳥と打ち合わせしてるので、帰つたらもう一回は確認しておいた方がいいかな。

二人の話が食い違つてしまつたら、せっかくの嘘がばれるかもしないし。

「では次で最後の質問よ。まあ質問というよりはお願いに近いのだけど…」

「お願いですか？　まあそのお願いを聞くかどうかは内容によりますね」

「まあ普通そうなるわよね…。そうね、私からのお願いというのは超人としての証を見せて欲しい、ということなのだけれど」

「超人としての証、つまり能力を見せて欲しいというわけですか？」

「そうこうことね。今の時点でもある程度は信用しているのだけれど、

やはり何の証拠もなく、私は超人です、といつ言葉を信じる訳には…」

「そうですね、では取引をしませんか？」

「取引？」

「ええそうです。私が能力を見せる代わりに、ガイアには私のことを内緒にしておいて欲しいのです」

「まあそれくらいなら構わないわよ」

「では取引は成立ということで、

私の能力をお見せしましょう」

ふう、ようやくこれで終わりか。

リボンは見せたら鍵だつてばれるかもしれないし、
能力は身体能力の強化ってことにしておくかな。
身体能力の強化なら多分鍵とはばれないだろうし。

「私の能力は身体能力の強化です。では実演してみせますので、
ちょっと硬貨を貸してもらつていいですか？」

「ええ、いいわよ」

朱音はそういうと10円玉を手渡してきた。

「以外とせこいですね…。」UJIは黙つて500円
玉を渡すくらいの器量が欲しかつたのですが…
「そんな事はどうでもいいじゃなし…。
重要なのは能力を確認することなのだし…。」
「まあいいです。それでは見ていて下さい」

受けとつた10円玉を指の間で挟んで押しつぶした。

「当然身体能力の強化はこの程度が限界ではありますんが、
さすがにどのくらいまで強化できるかは教えられません」
「ええ、能力を教えてくれただけでも充分よ」
「まあ私の力量については、ガーディアン内でも
上位に位置する、とだけは言つておきましょ。う。
襲撃をかけるならよく考えた方がいいですよ」
「襲撃をかけたりはしないわ…。」

今は大事な時期なのだし、わざわざ敵を
増やすような真似はこちらとしても御免よ。
それに私はできるだけ約束を守る主義なの」

よし、何とか戦闘は免れたようだ。

「では私は自衛以外では……いえ、小鳥への攻撃も含めましょ。」

「私と小鳥に手を出さない限り、私からそちらに手は出しません」

「それで結構よ」

「では、普段の私たちは部活の先輩後輩といつ」とで

「ええ、何も起こらない限りはね」

「ふう、真面目な話ばかりだつたし、精神的にかなり疲れた。今日はもう帰つてさつさと寝よう。

「さて、真面目な話をしたら少し疲れましたし、今日はもう帰りますね」

「ええ……お疲れ様」

「ではまた明日お会いしましょう。」

「という訳でお疲れ様でした」

……さて、これで朱音については問題なくなつたかな?

10月14日(木) 燃え上がるブログ(前書き)

思つたよつも長くなつてしまつたが、よつやく完成しました。

昨日ねつ造設定を喋りすぎて精神的に疲れたからか、今日起きたのは昼前だった。小鳥はちゃんと学校に行っているみたいだけど、朝は大丈夫だつただろうか？

昨日と一昨日の様子を見る限り、ちょっと不安だ。

不安だが…、まあ寝過ごしてしまったものはしようがない。

今日からオカ研も活動を再開するだろうし、早めに部室に行ってみんなを待っているとしよう。

と思いつつ、部室に行くと、瑚太朗がパソコンでブログを開いているところだった。ビーツやら試験は3時間くらいで終わつたようだ。

「最後に開いたの、いつだっけ…」

「試験前じゃない？」

「そうだつたな。掲示板を利用してみたんだっけ。

なんかドキドキするな。どんなレスがついてるか楽しみだ

「…カキコミひとつで大騒ぎだったことは記憶しておらぬか？」

「あつたような気もするけど」

「都合の悪いことは忘れてこりようですね」

私が来たのに誰も気づいてないようなので、さうっと会話に入つてみた。

「だねえ…。いたずら書き込み、どうなつたかね

つて篠ちゃんいつの間に来てたの…？」

「つこわつきですよ」

「お、久しぶりだな篠」

「ええ、みなさんご無沙汰しています。

まあ朱音には昨日も会いましたが。

それで、今は一体何の話をしているところですか？」

「ああ、今は先週作ったブログの確認をしているところだ」

「なるほど、それで例の粘着君についての話になっていた訳ですか」

「そんな感じだな。まあいくら粘着君でも何日も引っ張らないだろうし、

小鳥はちょっと心配しすぎなんじゃないのか？」

「でも瑚太朗君、ネットは……」

「平気平気。

新生オカ研はもちろん怪しいネタを扱うけど、活動自体は
実に健全かつ安全なんだぜ？ どこに批判の余地があるのか」

「殺人予告……」

瑚太朗たちには聞こえない音量で、ぼそつとつぶやいてみる。
どうやら朱音には聞こえていたようで、少し笑みがこぼれている。

「それはクールな方針なんだけどもねえ……」

「ワンダー！ すげえトラックバックの数だ！」

これがトラックバックの醍醐味つてやつだよ。

ガツツいしまつ！ ガツツいしまつ！

瑚太朗は右腕を突き上げながら、高速で規律着席を繰り返し始めた。

「どうしましょう朱音。瑚太朗が壊れました」

さすがにあのテンションの瑚太朗とは
絡みたくないの、朱音に話を振つてみた。

「放つておけばいいのではなくて？　どうせすぐに現実を知るのだから」

「それもそうですね。コメントの内容を見たらさすがにテンションは下がるでしょうね」

「それバックするトラックの空耳…」

小鳥は律義に突っ込んでいる。さすがに何年も一緒にいると瑚太朗の奇行にも慣れてくるのかな？
まあ私は慣れたくないけど…。

「ヒュウ、見るよー」コメントもたくさんついてる…

幸先良しだな

「… そう、なの？」

「……」

朱音は不敵な笑みを口元に浮かべていた。

「なんですか？」

「ふ…」

意味深な表情をした後、朱音はすぐに読書に戻った。

「まあ朱音の態度の意味はすぐに分かりますよ」

「篠は何で会長があんな態度を取っているか分かるのか？」

「ええ、きっと瑚太朗もブログを確認してみれば分かると思いますよ」

「知つてはいるけど教えないってことか…。ならじょうがない、ブログをチェックしてみるか」

「そうそう。何でも人に聞くのはよくないですからね」

私がそう言つと、瑚太朗は早速ブログのチェックを始めた。

「おわーつ。
冷静だつて言つてたのにつ」

どうやら例の殺人予告のコメントを小鳥も読んだようだ。

「ごめん、自宅からログインして…」

「これじゃ導火線の短いひとだよ。

どうしてこんなことしたの？」

「導火線に火がついた。どうしようもなく体が熱かつた。
体を冷ます何かをしなければ收まりがつかなかつた。まさに俺こそ炎だつた」

「おばか」

「…はい。

詫びレスでもつけておいた方がいい？」

「うん」

「あの一年坊、今頃ぶるつて震えているだろ？からな」

「ネットでの無知は断罪されるべきものよ」

さすがに突つ込まざるを得なかつたのか、朱音が口を挟んでいた。

「…く？ どういう話？」
「まずは続きを読むでみなさいな」
「はあ…」

瑚太朗は納得のいかない顔をしながらも、
とりあえず言われた通り画面をスクロール
させようとしているようだ。

「スクロールバーが全然動かないぞ…」

私より後の書き込みは見てないし、
私もちょっと覗いてみようかな。

投稿者「特命希望さん／一年ひみつ組」
タイトル「殺人予告！」

出ました！（笑）妄想屋お得意の殺害宣言…（笑）

殺人予告出ましたコレ！（笑）

あ、でも返り討ちにされないように注意してねー（笑）

相手、貴様よりも格段に強いから（笑）

投稿者「篝／一年ひみつ組」

タイトル「通報しました」

本文はありません

投稿者「特命希望さん／一年ひみつ組」
タイトル「殺人予告ですか…」

「おまえころすからあー、これはまずいと思つよ（笑）
ちょっと耐性なさすぎだったな残念…」「苦労さん…

…ま、停学一週間つってどこか？

「え、え、え…。

炎上だ―――――！」

「嵐じや、嵐が来ておるつ

ブログ炎上の憂き田にあつていた。

まあさすがに殺人予告出したらこうなるよね。

「な、なんだこりゃ―――っ！」

俺、政治家じゃないのに失言ひとつで猛チャージされやすかった。
ネット「えええええっ！」

「…………愚かしき」と

「まあ瑚太朗ですからね」

「つてよく見たら一いつ田の「メント籌じやないか！」

「気づかれたようだ…。

「気づかれてしましたか…。そうです、私が籌です」

とつあえずKIRAっぽく言つてみた。

「そんなことは知ってるよー！」

「まあまあそう興奮せずに落ち着いて下せー。別に通報はしてませんから」

「本当に?」

「……そこまで疑うのなら本当に通報しましょうか?」

「お止めください、籌様」

「分かればいいのです。

それで瑚太朗はどう対応するつもりですか?」

「うーん、粘着君に実際に会つてナシをつけ…いや、対話を試みてみよう!」

「瑚太朗君…。ネットの問題はネットで解決しそうよ」

「そうですね。今の状態の瑚太朗が会いに行くと、校内暴力事件が発生しそうですしつ…」

「俺の味方は俺だけか」

「さつさと謝つて、とつとと終わらせた方がいいと思つよ」

「…うん、でもさ。

リアルなら、負けないと思つ」

「何する気？」

「もちろん暴力なんて振るわないわ。

ただ吉野さんはどうかわからぬけどな」

「吉野君を連れて行く腹つもりなんだ。

無理じゃないかな…」

「いや、できる」

「でも、ここで頭下げないと、学校中から総スカンくらつかもだよ
下げただけで解決するかね、これ？」

「キチンと謝れば、きっと通じるよ」

「…わかった。身内にも影響あることだし、今回は誠意見せてもらひ

い」

「えらいえらい」

風祭学院の皆さん、こんにちは。オカルト研究会です！

当会は明るく楽しく身近なオカルトをモットーとし、皆さんとの
グッドリンクを目指して、清く正しく

健全な活動を心がけていきたいと思います！

ここでのひとつ、お詫びをしたいことがあります

先日、掲示板にて不適切な発言がありました

勢いに任せた発言ではありましたが、公式の場で許されるはずもない内容です

課外活動を行う者としての心構えが不十分であつたと真摯に受け止め、

今後一度と再発のないよう努力致します

この度のこと、誠に申し訳ございませんでした！

謝罪コメントのアップは完了したようだ。

「ふう…疲れた。

文章問題ないかなあ？

「うん、これなら誠意も伝わるよ
「だといいわね」「だといいですね」

朱音とかぶつてしまつた。

「さて、気を取り直して今日の活動、略してキョーカツだ

「恐喝…」

「キョーカツするわ」

「だから恐喝…」

「天王寺、天王寺ー」

「はい？」

「書き込みアリ」

「え、もう？ みんな早すぎる」

「試験も終わつたばかりで退屈なのでしじうね。

「うちの子たちのお祭り騒ぎ好き、相当なものよ」

「お祭り騒ぎじゃないんですけどね、こいつは…」

瑚太朗の手により、さつそく表示が更新された。

投稿者「俺様（喧嘩三十段）／一年ひみつ組」

タイトル「やつと詫びたのかよ」

俺だけど（笑）まあようやく詫びたかつて感じだな（笑）

誠意はあるみてーだけど、まだ調子こいてる文だな（笑）

ソッコー直しとけよ（笑）

俺に恐怖したんなら、ちゃんとそれなりの態度でいろよ（笑）

俺は屈服するヤツには礼儀求めるからよ（笑）

「…………」

「ー」、瑚太朗君…

「… パッ シーノ」

「え？」

「… 我に… 閻の力を与えたまえ…。

冥界の門を開けよ、あなたがたの名と名誉にかけて。來たりし万軍の悪靈の力を我に授けよ…」

「何か詠唱したわね」

「ええ、恐らくは厨一病の神を呼びだすつもりでしょ」
「出でよ、叛逆せる閻の皇子、パッ シーノ！ もおパッ シーノ！」
「いけない、邪悪なものを召喚しようとしてる。

ギャルパンちつ

「癒され体质つ」

「… はつ？ 僕、いつたい…？」

「怒りで我を忘れていたみたい。

もう大丈夫だよ」

「そうなのか、よくわからないけどありがとつ。

…しかしひどいやつだ、こいつ。

先輩に対する態度じやないぞ」

「そうだね。ついでに初対面に対する態度でもないね。
きつと、可哀想なんだよ。

だから許してあげなよ」

「うん… けどなあ… 向こうがこれで飽きてくればいいけど」

「書き込みよ、天王寺」

「だーつ

投稿者「俺様（喧嘩三十段）／一年ひみつ組」

タイトル「はい時間切れ」

おいおい、駄目だろ雑魚虫君（笑）すぐに直せつついたろ？（笑）
とりあえずもうタイムオーバーなんで、

クソ研究会の雑魚虫同士で10発ずつ殴り合えや（笑）

終わったら報告しろよ？ そしたら次の指令出すからよ（笑）

「久々にイラつときましたねこれは…。」

瑚太朗をけなしているだけならよかつたのですが、他のメンバーまでけなすとなると……。

よしひ、ちょっと社会的に抹殺してきましょ「

「駄目だよ篠ちゃん！？」

「止めないでください小鳥。人にはやらなければならぬ時があるのです。

そもそもこの粘着君のせいで私のコメントが2番目になつた時からちょっと

むかついてましたし」

「今はやらねばならない時じゃないと思つよー？」

「それとコメントの件はそんなにむかつかなくとも…」

「……それもそうですね。小鳥の癒しパワーのおかげで何とか冷静になれたようです。という訳なので瑚太朗、獲物は譲りますので好きに料理してきなさい。あ、ちなみに暴力は駄目ですよ」

瑚太朗観察日記をちらつかせながら、瑚太朗にお願い（命令）する。

「イエッサーー」

「うん。いい返事だ。

「小鳥も暴力なしなら構いませんね？」

「そういうことなら」

よし、小鳥の許可も出た。

「じゃあ決まりだな。あの、会長。これ書いた一年生って誰かわか

ります？」

「特定しろと言つの？」

「はあ、無理つすかね」

「…できない」ともない。

が、あまり便利に使われるのは好まないわ

「じゃ今回だけ、今回だけにしますから」

「…どうだか」

そう言いつつも朱音はどこぞに電話をかけている。

何だかんだで面倒見がいいな。

電話をかけてから数分後、折り返しの電話が返ってきた。

「わかつたわ、一年C組の…」

「すぐでしたね」

「うちのネットワーク管理は教員でね」

「す、すこか権力たい…」

「暗黒魔法だ。回復や補助は苦手だが人を貶める術が多いんだ」

「敵に回さないようになきゃ」

瑚太朗は聞いた名前をメモすると、そのまま部屋を出ていった。

「瑚太朗君大丈夫かな…」

小鳥はまだ心配なようだ。

まあこの前は電話帳引き裂いてたし、しょうがないかな。

よし、ここは一つフォローを入れておこう。

「大丈夫ですよ小鳥。瑚太朗を信じてあげなさい」

「篝ちゃん…」

「そう……、瑚太朗ならきっと粘着君を血祭りに上げてくれるはず

です！」

「そつち方面に信じぢや 駄田だよ！？」

「まあ今のは冗談です。さすがに瑚太朗もやつていい事と悪い事の区別くらいはちゃんと付けるでしょ」「うん…。そうだよねつ！」

よつやく小鳥も瑚太朗を信じじる」としたよつだ。

「では瑚太朗が戻つてくるまで私は読書でもしますので」「わかつたよ」

といつ訳で一日読書タイム！

「江頭…」

お、本に集中してたらいつの間にか瑚太朗が戻つてきてる。どひやら粘着君はひやんと連れてきたようだ。

「はい先輩…」
「意味わからん…」
「すいません…」
「本気で書くといつこの文章になるのか」「はい…」
「最初と全然キャラ違ひじやねーか」「……」
「和解つて理解してもらえるのかこれ？」
「まあいいや、補足しとく…帰つていいぞ」
「は、失礼いたします」
「脅かしたんだね？」

「脅かしたみたいですね」

「…いや、そこまでのことはしないんだけど…。」

「変なスイッチ持つてるヤツだったみたい」

「ネタを提供させたそうだけど、そちらの方はまともなのかしら?」

「なに、駄目で元々。調査するときに確認してみますよ」

「ほいじゃ、どうする?」

「そうだな…。」

「ネタがあるから、さつそく調査してみよう」

「初調査だね」

「これにしよう」

「ツチノコ…?」

「ツチノコは満腹のベビ」

まあその辺りが妥当な線かな。

「夢がねえつ」

「ツチノコは手品」

手品つて……。

「無茶苦茶ですね、あんた…。」

「未確認の動物は実在する余地あんでしょー」

「未確認の動物はいても、その中にツチノコはないでしょ?」

「あれこそ、まさに流言飛語」

「…まあ、そういう可能性も高いですわな」

「おや、素直」

「俺自身がツチノコ実在に確信を持っているわけじゃないんで。でもいないとも断言はできない。だから調べたい」

「具体的にはどうやるの?」

「ネットの力を利用したい」

…ところだけど、今はちょっとネットは離れて…直に聞き込みをしようかと存じます

「校内の」とだしね

「ツチノ」「田撃報告、確かに最近、よく耳にするわね」「情報提供者からも、うつたメモによると、そこには中庭を中心とした撃打が多い発しているようだ」

「これからすぐに行けば、人も残ってるかもね」「ああ、張り切って調べよう

「…いつてうつしゃい」

「会長も来てくださいよ」

「いや」

「どうして」

「とも、面倒」

「……」

「さんにんで行く？」

「すみません、私も一旦バスで。

聞き込みとか面倒ですし。

「…」

「うーん…。

よおおおおっし、あきらめるわおおお… イヤアッ…」

「…積極的に消極的だね」

「ふふふ、私の手を患わせない範囲で、おまえの好きにしたらい

わ

瑚太朗は小鳥とふたりパーティーでクエストすることになった。

「行つてしましましたね…」

「そうね。じゃあ私は本でも読んでるから、あなたも好きにしなさい

い

「そうですか…。では私も読書に戻るとします」

朱音も本を読み始めたようなので、じつはも読書に集中することにした。

本を読んでいる途中でツチノコについてちよつと
気になることを思いついたので、朱音に話しかけてみた。

「ラスボスさんすみません、ちょっと聞きたいことがあるのですが
…」

「？」ラスボスって私のこと？」

「ええ、そうですが？」

「何でそんなおかしいものを見るような顔で見つめられているのか
全く分からぬのだけど…。大体何で私がラスボスなのよ…」「
瑚太朗が会長はラスボスだから氣をつけろって言つてたからです
が？」

とつあえず瑚太朗に罪をなすりつけてみよう。

「天王寺とは後でちょっと HA NA SHI が必要なようね
…」

今の言い方からすると、なのは式かな？

「まあ瑚太朗との O HA NA SHI は後でやつてもうつして
て、

今瑚太朗たちが探しに行つて いるツチノコですが、もしかして
魔物でそれっぽいのがいたりしますか？」

「ええ、いるわよ。使用者は少ないけれど、蛇をベースに
した魔物でツチノコとよく似た特徴を持つて いるそつよ
「なるほど。おつと、ラスボスさんと話していたらいつの間にか

けつこう時間が経つますね…。どうやら瑚太朗たちも來たみたいですし、この話はここで止めておいた方が良さそうですね」

小鳥はいいけど瑚太朗に聞かれていい話じゃないし。

「天王寺たちが来ているの？ よく分かるわね。

「ここは一応完全防音なのだけれど…」

「まあ聴力を強化すればこの程度の防音は問題ないですからね」

「本当、便利な能力ね…」

「あ、ちなみに瑚太朗はラスボスとか言つてませんので」

「ええ分かっているわ、私も少し乗つてみただけよ」

「それならいいのですが…。いくら私でも無実の罪で

瑚太朗が処刑されるのは目覚めが悪いですからね」

「処刑なんてしないわよ…。あなたは私を何だと…

「いえ、やっぱり言わなくていいわ。絶対ラスボス

って言つてくるでしょうし」

ち、どうやら思考を読まれたようだ。

「んじゃ、デジカメデジカメと…」

「何を勝手に漁つているの」

「は、部の備品を探索しているあります」

「…カメラはその棚」

「あ、こっちか」

「メモリのカードはどこですか？」

「一緒に入ってるわ」

「借りて良いです？」

「ご自由に…」

「すげ、電腦小僧大喜び…」

「千枚取れるよー」

「おうつ、俺だつてデジタルズームと顔認識で被写体逃さないぜー。」

「ヤー！ ジヤ、改めて…」

「「んにちはー」

お、よひやくちはやが来たようだ。

「ん

「げ

「相変わらず失礼な挨拶だな」

「流行るかもしれないわね。人に会つたら開口一番『『げ』』

「げ、会長！」

「短くていいわね」

「なんだかよくわからないんですけど…」

「とりあえず何で瑚太朗がこんなところにいるんですー…？」

「逆に訊きたいわね。何であなたは

今までこんなところにいなかつたのかしら」

「え、えーと、それは…」

「大方道に迷つてここまでたどり着けなかつたんだろう

「う…」

さすがはちはやだ。いくら広いと云つてもさすがに一度は行つたことのある部室まで辿り着けないとは…

「ま、いいけど。毎日顔出せとも云つてないし

「だつて、おんなじようなとこばっかりで、どこだかわからなくなるんですよー…」

なんか知らない人たちにちくちく裁縫するよう勧められて、そつち行つてばっかりで…」

「…手芸部？」

「空き教室を拠点に活動してたわね、そういえば。同好会だけど」

「一生懸命断わりとしてたんですねけど、ようやく断りました…」

「そりや難儀だつたねえ…」

「お前本当によく迷うな…」

「そのうちシベリア行きの船にでも間違えて迷い込んで死ぬわね」

「朱音さん、冷たい…」

「それと、手芸同好会は掛け持ちでも良いのよ」

「もつ針はいいです…」

「…………誰さん、私の存在を忘れていませんか?」

「「あつー」」

「えーと、どちら様です?」

「私は小鳥の親友の篠です。私もオ力研

所属ですので、今後とも宜しくお願ひします」

「あ、これは」「寧にどつも~。私は

鳳ちはやです。私も一応オ力研所属みたいで

「つて、ちーちゃんもこ」所属なの?」

「はい、えーと、多分そつです」

「ああ、そういうやそんなこと言つてたな。じゃあ、篠と鳳の
自己紹介も済んだみたいだし、早速五人で調査開始つ!」

「開始つ!」

「は、はい? 突然なんです!?」

「せつかくだから付き合つてあげなさい」

「ええ~、でも…」

「あなたとしても、この子のパワーは欲しいところだしそ?」

「有用そудだし、念長が手綱とつてくれるんですね」

「そうね」

「なんかよくわからないんですけど、朱音さんがそう言つなら」

ちはやがメンバーに加わった!

「じゃ、がんばって」

「来ないのかよ…」「来ないんですか……」

「つか、タイミングぴったりっ」

「あ、ちなみに私も今日はもう帰りますから」

ちはやとの顔合せも済んだし。ちゅうと読みたい本もある。

「ええっ！？ 篠ちゃんまで来ないの？」

「ええ、ちょっと読みたい本があるので今田はもう帰りますか」と

「そつか…。じゃあ仕方ないね」

「そういう訳ですので、皆さんお疲れ様でした」

「ああ、お疲れ様」「お疲れ様です～」「…」「苦労様」「おつかれ

わま～」

…これでちはやとも面識を持つたし、後才力研メンバーで面識がないのは、
ガーディアン勢の静流とルチアだけか…。
まあ正体ばれとかはないはず…だよね。

10月15日(金) アルファプロガーへの道(前書き)

ようやく更新できました。

一日一回更新はきつくなつてきましたので、
これからはちょっと更新頻度が下がりそうです。
ですが多分週に2~3回くらいは更新すると思いますので、
これからもよろしくお願いします。

10月15日（金） アルファプロガーへの道

「今日は集まりが悪いみたいですね」

放課後になつたのでいつものようにオカ研部室に遊びに来たが、今日は人が少ない。『やや小鳥』とおはやは来てないみたいだ。

「おお、篠ちよ「うじい」とこに来たな」

「どうしたんですか？」

「いや、ブログ用の記事が書き終わつたんで会長に確認して貢おひと思つたんだけど、うちのボスは『覧の有様でな』

どんな状態なのかと思い、朱音の方を見てみる。

……朱音は画面を睨みつけ、キーボードを連打していた。

「……なるほど、朱音の代わりに私に確認して欲しいとこ「う」とですか」

「やうじいことだな。という訳で確認してもらつてもいいか？」

「まあそういうことならいいですよ。私もオカ研の一員ですし」「すまないな。じゃあこれ、確認してみてくれ」

そう言つて瑚太朗はパソコンの前を空けた。

どれどれ、どんなものができているかな。

……これは。

「どうだ？ 自分では良く出来たと思つんだが……」

「ええ、まあ私も良く出来ているとは思いますが、思いますが……」

「思いますが？」

「何でこれだけ文章が書けるのに、ブログ開設時の

挨拶文はあんなに酷い出来だったのですか?」

「う……それは」

「それは?」

「すみません、小鳥に褒められたつしてひよつと調子に乗つてました」

「では今後はきちんと推敲してアップロードするよ!」

「分かったよ……。ですがに第一の江頭が出てきたら困るしな」

「今回は私もチヒックしましたし、このままアップしてもいいこと思ひますよ」

本当、瑚太朗は調子に乗りさえしなければ
けつこうハイスペックなんじゃないだろ? つか?

「……じやあこれで完了」と

ブログの更新は完了したようだが、瑚太朗は全く
動かない。どうやら何か考えているみたいだけ? ...?

「自作…自演…?」

ろくな考えじやなかつたみたいだ。

「それは罷よ天王寺。

ブログは…手数」

お、いつの間にか朱音がゲームを止めてる。

「手数…?」

「そつか、更新頻度を限りなく高めれば…」

「そつか、その時おまえはアルファブロガーにもなれよ?」

「マジすか…。

手数勝負…もつと記事を書けつてことだ。

ならネタ募集もしなくては…」

「しなさい」

「月に一回更新とか、そんなレベルじゃなくて…

そう、最低でも週に一度の更新をしちゃわなくては…」

「しちゃいなさい。

アルファブロガーは、日に三度更新することもあると…

「なんだよそりや…どんだけ時間あまつてんだあ」

「時間は余るものではなく作るもの」

「かっこいい！」

「会社のパソで更新すりやいいのよ」

「……解雇リスクを背負つての更新っすか…。

でもウチは更新するためにはネタの投書がないと…」

「ご覧」

朱音が指さしたのは、投稿フォームからの
着信を振り分ける指定フォルダだった。

「あ、投書来てる」

お、ネタが4件も来てるみたいだ。

「おお！

ど、どんなネタだ…？」

ネタ『31歳人妻です。浮気相手を探しています』を入手した！
ネタ『女子×学生つてダメ？ エツチなこと教えてくれる人募集』
を入手した！

「ガセ以前の問題だあ！」

ネタ『31歳人妻です。浮気相手を探しています』を削除した！
ネタ『女子×学生つてダメ？ エッチなこと教えてくれる人募集』
を削除した！

「…身内の犯行」

「またネット海賊か…」

身内って校内でしょ。いやな気分になるなあ

「ネタの蓄積があれば選択肢が生まれる」

天王寺、勝ちたいならネタをお探しなさい。

そして記事を書き、頻繁に更新なさい。されば…！」

「相乗効果で！」

「バツキバキやで！」

「…そういうことを言つキヤラでは、ない」

「自分でノつたでしょ。俺悪くない」

「あまり調子づいていると暗黒魔法の餌食だから」

「…それって政治力でボコるつて意味だからなあ…………」

「とにかく、あまり更新していないとネタも集まりが悪くなるのは必然。

キチンと活動していれば、おのずと人も集まるはずよ

「そうなると相乗効果で！」

「…もうその手には乗らないわ」

ちつ、さすがに引っかかるなかつたか。

「ふーむ。

夢が広がるな…」

「ところで、投書ではない普通のメールも来てているのね

「え…？」

「新聞部・井上。

知り合い？」

「あいつか……」

「噂を聞いたことがあるわね。知り合いだったの？」
「…向こうから話しかけてきて」

「まあ見てみましょう」

『天王寺君、記事、見たよ。

出来映えはまだまだだけど、その行動力は かな。
正直、こんなにすばやく動くとは思ってなかつたから、見直した
かも。

文章はぎこちないし、切り口も甘いし、ネタ記事以上のものには
なつてないけど、エンターテイメントとしてはアリかな。
健闘を祝して、スクープをひとつ提供してあげる。
うちでは持てあましたネタ。まあ頑張つてみてよ、本職さん。
ばーい井上』

ネタ『敷金礼金なし、幽霊同居物件案内』を入手した！

「ネタをゲットしたわね。私が言つていたのは『うごう』とよ
「幽霊ネタはちょっとイヤなんですね……」

「選べる立場なの？」

ひとりで調査するのが恐いなら、友達でも誘いなさい
「友達…」

どうやら交友関係の狭さから悩んでいるようだ。
しうがない、ここには助け舟を出しておくかな。

「ちはやでも誘つたらどうですか？」

「ちはよとちはよと一緒にけば恐さがなくなりますよ

「確かに、ちひはやと行つたらホラーがコメティイになりそうね」「いや、まださすがに一人つきりつてのは無理だろ？」「それもそうですね」

「まあしばりくそつやつて遊んでいるといいわ。多少のトラブルはこちらで吸つてあげるから」

「ありがたい話ですけど…」

やつぱり朱音は瑚太朗に甘いな。

「あ、ありや 静流だ」

「じつやら窓の外を見ていたら静流を発見したみたいだ。

「誰？」

「ん、知り合いつす。

「どうだー、お前も来るか 」

おーい、と手を振つてゐる。

「窓開けなきや、見えも聞こえもするわけないでしょ」「ま、そうすね」

がら、と窓が開かれた。

「ありや、もういねえ」

話が済んだと思ったのか、朱音は唐突に機械を取り出し、ドンと机の上に乗せた。

「なにこれ」

「コーヒー ハーメーカー。使えないけど」

「壊れたんですか？」

「ちはやがいじってたら壊れたのよ。

「ほら、これ…ダイヤルが馬鹿になつてゐる

「さすがはちはやですね」

「もう新しいの買つたらいじやないですか」

「もつたいない。直るなら直すべきだわ」

「まあ、わかるけど。

でもこいつ修理つてよくやるんですか？」

「やらないわよ

「見せてください」

「こいつに慣れているのか、瑚太朗は大して時間もかけずにコーヒー ハーメーカーを分解した。

「うわ、古いな…」

確かにかなり古い。

よくこんなものを直してみよつと思つたな。
お金はあるだらうし、買えばいいの！」

「うーむ

「直る？」

「無理ですね…ダイヤルの部品が欠けてるとかなら何とかしよう
があるけど、中の機械がイカレてるならもうひじょうもない

「仕方ないわね。買い換えましょ」

「まあ、いいんじやないです？」

「この部屋にはなんか不釣合いだし」

「愛着つてものがあるのよ。それにご存知？ 長く

使われたものには靈が宿るの。シクモガミつて言つてね」

朱音はそつ言いながら、外装を手に取った。

「荒ぶれば妖怪、多く禍をもたらし、和ぎれば神、幸をもたらす。どこの国でも似たような話は在るわ」

「日本バージョンだと、百年要るんじゃなかつたっけそれ」「あと八十年ちょっとじじゃない」

「達成するころには俺ら死んでそうですが」

「案外その宿る靈つてのは、使つていた人間そのものだつたりね」

「こえー」

「素敵じやない。

ま、廃棄」

外装を「ミ箱の傍らにぽん、と放る。

すかさず秘書らしき人がそれを抱えあげた。

……ところであの何て名前だったかな？

「中身も一緒に捨てといて」

……愛着、愛着ねえ。

と、そこにどんどん、とノックの音。

「ん」

「出て」

びし、とドアを指差す朱音。

「へいへい……」

瑚太朗は朱音の要請により、来客の確認に向かつた。

「オカ研に来客なんて珍しいですね。一体誰が来たんでしょうか?」

中々瑚太朗が帰つて来ないので、朱音に話を振つてみる。
まあ来たのは多分静流だろうけど、一応とぼけておかないとね。

「さあ? 」こを訪れる人なんて、私たち以外にはいないはずだけ
ど…。

「というかあなたなら誰が来たかくらい分かるのではなくて?」

「まああまり無駄に能力を多用するのもどうかと思いますし、
普通に部室から出て確認してみましょ?」

「面倒だわ…」

「まあまあそり言わずに」

面倒くさがる朱音を何とか説得し、部室の外に出てみる。

「『褒美にキス?』

後輩女子にセクハラつと。

今、瑚太朗觀察日記に新たな一ページが刻まれた!

「…………！」

静流は手をぶんぶんさせて否定していた。

「じゃあ…」

「口の動きと喉の動きで大体わかる」

「読唇術つか…」

てか、あの距離から?」

「見える範囲なら…コタローは口の動き大きいからわかりやすい」

「すげえじゃん…」

「あなたなんぞが私を『使う』つもり? 身の程知らずもいいところね」

さすがの朱音も瑚太朗に利用されるのは嫌なようだ。

「あ、いえ」

「見てたわ。すごいわね、あなた」

「本当、読唇術が使えるなんて凄いですね」

静流は瑚太朗の後ろに隠れた。

「ああ、人見知りだから気にしないで。

ほれ、静流さん挨拶です」

「……………静流です」

「じゃ、朱音よ」

「私は篝です」

「よろしく」

「こちらこそよろしく」

「私も宜しくお願ひしますね」

「なあ、こいつ活動に参加させていいですか?」

「?」

「つまりだ……」

瑚太朗がオカ研の活動について説明した。

「……やりたいが……」

「部に所属はできない」

「そうかあ。」

「じゃ、手伝いでいいから」

「それなら
「いいのかつ」

ぐ、とOKサインが出された。

「強引ねえ……」

「いいじゃん。こいついたら楽しそう」
「樂しいっていわれてもね。

部外者はあまり

「役に立つから、良いじゃん！ お願ひ…… ねえつたら……」

「ああはいはい……駄々つ子の相手はいやよ」

「だそ'うだ。やつたな静流」

「よくわからんがやつたのか？」

「やつたわ」

「おー」

「……別に、いいけど……」

責任、あなたが取りなさいよね

「別に大丈夫だろ」

「私は言つたわよ」

朱音はそういう残すと部室に戻つていった。

「……私は、『タローの手伝い』？」

「そうね」

「ではこれからも直しくお願ひしますね」

……静流がオカ研にお手伝いさんとして参加することになった！

10月16日（土） 魔神が生まれた日（前書き）

今回は中々時間がかかってしまいました…。
やつぱり週に2～3回更新は難しいみたいなので、
週に1回くらいの更新を目指していきたいと思います。
ちなみにタイトルは本筋とは全く関係ありません。
本文を書いている途中にふと思いついたのでこれにしてみました。
分かる人は分かると思いますが、コードギアスから取りました。

今日も今日とて部室へと向かう。

まあまだ休み時間だから朱音くらいしかいないかもしだれないので、
一人家で暇を持て余しているよりはいいだろ？

……そういえば部室はネット環境も整ってるし、授業の間は
部室に居るのもいいかもしだれ？ 今度瑚太朗とちはやが居ない
時にでも朱音に頼んでみよう。そんな事を考えながら部室の前まで
行くと、中から話し声がしていた。

「ハハハ、お嬢様は冗談がきつい。どこの馬の骨様に、
ちはやさんのファーストネームを呼ばせるなどとは
「こちいち腹の立つ野郎だな」

この声は咲夜かな？ どうやら今日は咲夜が来る日だつたみたいだ。

「…ふん？ とりあえずあなたの初対面の印象は最悪でした。
もう少し落ち着きというものを持つていただきたい
「それには私も同意します」

とりあえず、私、参戦！！

「うわっ！ いきなり現れるなよ篠。びっくりするじゃないか」
「何か休み時間なのに部室が騒がしかつた
のでちょっと様子を見に来てみました。

それで、一体こちらの方はどなたですか？」

「ふむ…、あなたもオカ研の部員ですか？」

「ええ、私は篠といいます。どなたかは分かりませんが、宜しくお
願いします」

「これは」「寧ろ」でも。私はちばやさんの兄で、鳳咲夜と申します

「なるほど。ちばやのお兄さんでしたか。では改めて宜しくお願ひしますね」

ええ、いやいや

特に問題も無く自己紹介は終わつた。

やつはり瑚太朗に対して色々と言つるのは、瑚太朗の言動のせいかな？それともちはやが瑚太朗の事を家で話していたからだろうか？

「会長…、俺に対する態度と全然違うんですけど…」

明治十九年

私が咲夜と普通に話しているのを見て、瑚太朗が落ち込んでいた。

「何か篝の登場で話が逸れてしまつたけど、こいつらとしても
ガノ無観」とか、刃村面の印象は最悪だつたナゾだね。

「まあ私は別にちはやでもいいんですけどね」

かはなはやいとじその馬の骨様に慈悲深いこと

「うわ、やばい！」

何を馴れ馴れ！

「あなたは世界トップランクの栄誉を得ることでしょうね」

「個人的にも私はあなたが嫌いです」

「うわあ、どうかで聞いたよいな台詞」

「わかりましたー」

「それと、お茶菓子をお持ちしていたのを忘れていました。
お嬢様と篝さんもよろしければお上がりください。中身はクッキ
ーです」

「…ありがと」

「ありがとうございます」

「えーと、それから…あなたは…。

馬ノ骨ゲス野郎君でしたか？」

「て・ん・の・う・じ・こ・た・る・うだ!!!!」

「似たようなものですね。よろしければどうぞ」

「咲夜さん、今のはちょっと聞き捨てなりませんね」

「そうだそうだ。言つてやつてくれ篝」

瑚太朗は私が加勢すると思つてゐるようだが……
それは大間違いだ!!

「(+)」にいる瑚太朗の事はどう言おうが構いませんが、

今の発言は、全国の瑚太朗さんに失礼ですよ

「確かにそうですね。」忠告ありがとうございます。以後は気をつけましょ」

「俺を擁護してくれるんじやなかつたのかよー?」

「いえ、普段の瑚太朗の言動を見ていると、
ナチュラルに失礼な態度を取つてそうですし」

「俺つてそんな認識なの!?」

「ええ、まあ割と」

私がそう言つと瑚太朗はがっくりと膝をついた。
どうやらけつこつなショックを受けたようだ。

「ああ、あと……」

「なんだよ……」

声に全然覇氣がない。ショックは思ったよりも大きいようだ。

「…あまり余計なことに首を突っ込まないことです。

私はあなたが『嫌い』ですから」

「…んな念を押されなくとも」

咲夜がじろり、瑚太朗を凝視している。

「な、なんだよ」

今度は朱音のほうを。

「何？」

「まあ、いいでしょ。お嬢様のお付には相応しいのかも知れません」

「やりましたね朱音。褒められましたよ」

「そう? これは褒められたのかしら?」

「さあ、どうでしょ。それも瑣末なことです。では、御機嫌よ」

一礼して出て行った。

「…ねえ、お嬢さん、あいつ普通に出て行きましたが、
田立つちゃまずいんじゃなかつたつけ?」

「もうどうでもいいわ…」

「あ、そう」

「それはいいけど、もう休み時間終わるわよ
「げつ!…当初の目的が!」

そう言つと瑚太朗はダッシュで部室を抜け出した。

「結局瑚太朗は何の為に部室に来たんでしょうつか…」

「さあ?」

「何ででしょうねー」

ちはやがのんびりとした声で答えた。

とこりかちはやも授業があるんじや……。

「何かのんびりしてるみたいですけど、

私たちも早く戻らないと遅刻ですからね?」

「ああつー! そうでしたつー!」

素で忘れていたようだ。さすがはうつかり魔人……いや
ここはもう、うつかり魔神とでも呼んだ方がいいだろうか。

「やついえばちはやは何をしに部室まで来たんですか?」

ふと疑問に思つたので訊いてみた。

「ええと、朱音さんを昼食に誘おうと思つて…」

「私を? まあ別に構わないけれど…」

「本当ですか! ? じゃあ授業が終わつたら
部室に来ますから、待つてくださいね

「ええ、わかつたわ」

そう言い残すと、ちはやも慌てて出て行つた。

直後、何か鈍い音がしてきたが、まあちはやはだし大丈夫だろつ。
さて、ちはやと瑚太朗は居なくなつたし、部室に
入り浸る件について今のうちに頼んでみるかな

「そういえば朱音、ちょっとお願いしたい事があるのですが…」
「あなたが私に頼み事？ まあ内容によるわね」

まあそれはそうだらう。

「えつと、お願いしたい事といつのは、小鳥が学校に行っている間家にいても暇なので、部屋に置いておいてもらえないかなーと思いまして…」

「いいわよ」

「そう言わずにそこを何とか」

「だからいいわよ」

「え？ いいんですか？」

「ええ、だからそういう言つていいんじゃない」

「ありがとうござります。正直もつと泣かれると思いましたが…」

「何？ 断つて欲しかったの？」

「いえいえ。ありがたく部屋に入り浸らせてもりいます」

「まあ、私も一人よりは誰か傍に居てくれた方がいいしね…」

朱音が普通の人には聞こえないくらいの音量でぼそつと呟いた。
まあここは聞こえなかつたことにしておいた方がいいかな。

「何か言いましたか？」

「いいえ、何も言つてないわよ」

「そうですか

「ええ、そうよ」

「では今後は部屋に入り浸る事になると思つますので、
今後ともよろしくお願ひします」

.....何はともあれ、朱音からの許しも出たし、
来週からは部室に入り浸ることにしよう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0354y/>

毒舌？な篝(かがり)ちゃんのほのぼのオカ研生活

2011年11月24日22時53分発行